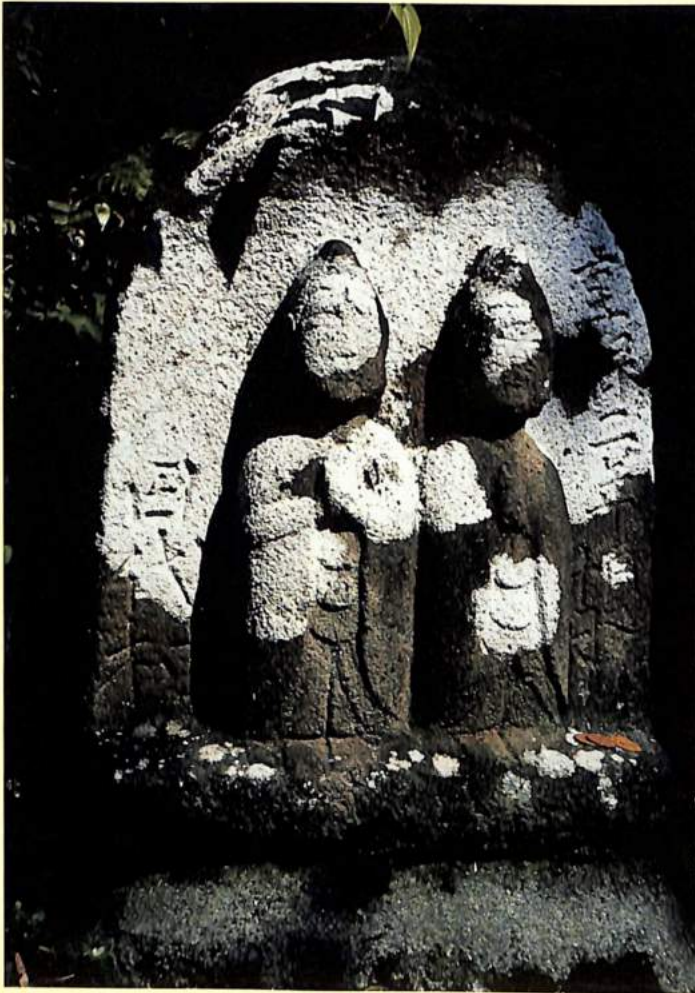


函南町の石造物(一)



1 9 9 0

函南町教育委員会

付録地図付き

序

厚く御礼申し上げます。

平成二年三月

私たちの郷土函南町には、先人達が残し伝えてきた貴重な文化遺産である「文化財」が数多くあります。こうした文化財やその歴史の意義を知っていただこうと、教育委員会では「函南町の文化財（初版・改訂版）」などを発刊してまいりました。

函南町教育委員会教育長

露 木 稔

このたび、ここに石造文化財の資料集である「函南町の石造物（一）」を発行し、皆様方にお届けいたします。

ここに収録された石造物のほとんどは路傍にあるもので、普段何気無く見過ごしているものや、地域の人たちの手でお花やお水が供えられているものなど、さまざまです。場合によっては、以前はあったものがいつの間にならなくなってしまったものもあります。

本書は、どこに・どんな形の・どんな物があるかを写真を中心に紹介した資料編と、何故その場所に・誰が・どんな目的で造ったのかを説明した解説編とで成っております。

本書をご覧いただいて、こうした石造物に対するより一層の理解と関心を深めていただき、次代に受け継がれ、ひいては「ふるさと」函南に対する愛情を深めていただければこれに勝る喜びはありません。

本書の発刊にあたり調査にご尽力をいただいた調査員の皆様方、解説編に玉稿を賜った齋藤先生、お世話になりました地元の方々に

例 言

一、本書は静岡県田方郡函南町内に所在する石造物の資料集(一)である。

二、本書に掲載した資料は原則として江戸時代までの石造物のうち民間の一般的な信仰に伴ったもので路傍のものを中心とした。このため特定された宗派等に属するものや、寺院・神社内の石造物は除外してあるが、一部この限りではない。

三、本書に係わる事業は、函南町教育委員会が計画した町内石仏調査事業の第一次事業として、平成元年八月より同年十二月にかけて行ったものであり、資料の確認・検討や資料集の構成方法等は次の調査員に依頼し実施した。(五十音順・敬称略)

石川 雅道(函南町歴史研究会会員)

梶尾 是彦(函南町歴史研究会会員)

久保田 弘(函南町文化財保護審議会委員)

三田 利雄(函南町歴史研究会会員)

渡辺 宗正(函南町歴史研究会会員)

なお、一章・資料編の概要を梶尾、各石造仏の紹介を渡辺、一欄表を事務局で執筆ののち、全調査員で検討を加え更正を行った。また、写真は石川が撮影した。

四、本書に掲載した資料は、狩野川沿、仁田宿、畑毛地区、日金路、箱根路の五地区に分け各地区ごとにまとめた。

五、本書の各資料番号は別添の地図番号と同一である。

六、一覧表のうち刻記文の不明なもので字数がわかるものは□、字数の不明なものは……で表した。

七、一覧表のうち「道祖神」と「サイの神」の区別は地域においてサイの神と呼ばれるもののみをサイの神とし他は道祖神とした。

八、本書の編集は、調査員の了解のもとに事務局で行った。

九、本書の監修は、齋藤 宏(函南町文化財保護審議会副会長)に依頼し、二章・解説編の原稿を頂いた。

十、一章の一覧表を作るにあたり次の本を参考にした。

「伊豆のサイの神」前編―私の中の道祖神 第二部―吉川静雄

「東伊豆町の石造塔」 東伊豆町教育委員会

「富士市の石造文化財」(第1集、第4集) 富士市教育委員会

「民間信仰」三島市誌 増補 資料編Ⅰ 三島市

十一、本書に係わる事務局は、函南町教育委員会社会教育課が担当した。

十二、本書に係わる資料は、事務局で保管している。

十三、函南町教育委員会では今後、寺院・神社の石造物や本書で取りあげなかった種類のものも含めた、石造物資料集の第二集づくりを計画しています。本書に掲載した資料以外にもまだ各地に所在するものがたくさんあると思います。こうしたものは第二集で補足したいと思いますので、ご存じの方は事務局までご連絡下さい。

目次

一章・資料編

概要	1
----	---

狩野川沿	2
------	---

仁田宿	25
-----	----

畑毛地区	31
------	----

日金路	38
-----	----

箱根路	57
-----	----

二章・解説編

函南の石佛をたずねて

―路傍にみる民間信仰―

はじめに	72
------	----

一 サイの神(道祖神)	74
-------------	----

二 庚申塔	81
-------	----

三 観音像	87
-------	----

聖観音	87
-----	----

聖地順礼塔	88
-------	----

如意輪観音	90
-------	----

馬頭観音	90
------	----

四 地神塔と山の神	91
-----------	----

五 地蔵(六地蔵)	93
-----------	----

六 磨崖仏と三宝荒神	96
------------	----

七 阿弥陀如来	98
---------	----

八 大日如来	99
--------	----

九 不動明王	100
--------	-----

十 騎馬像	100
-------	-----

十一 石棒	101
-------	-----

十二 石造物の年代別造立数	104
---------------	-----

小結	105
----	-----

さいの神

この国に漢字が入る前からの呼び名と思われます、その後漢字と道教が入ってから色々の文字が使われました。さいの神 自信は生産を祈る神であり、安産の神でもあり、集団の繁栄を願う神でもあって、火で清める習いがあったので、村外に祀られ、どんどん焼きにも祭られ、約束事を誓ったりもして身近な神だったようです。山の霊 巖の霊のような精霊とは多少違い、多くの願いがこめられて親しみのある神さまです。そして、村の外で村に入ろうとする悪霊を防ぐ意味を含めて、音のまま漢字にした塞の神、道教の考えから、生きる道の元の神として、道祖の字をあてて、さいと呼んだり、漢よみして、どうそと呼んだりしたようです。

地の神

地鎮さん 堅牢神等は河川が溢れて、田畑が荒らされたとき、地を司る神に、供物を捧げ、作物が無事に実りますようにと祈ったものです。地鎮さんのある所は昔、川が荒らされたことを示しています。浅間さんも、富士山が噴火して、灰や石を降らせたのにたいし、田畑を守って下さいと祭ったのと同じです。

庚申さん

道教がこの国に入ってから、運不運を統計の手法で推定する道で、庚申は悪日として不運からまぬがれる方法として、庚申を神格化して祭られたものと思われます。神格化の過程で色々の表現が使われています。

馬頭観音さん

観音さんはすべてのものに成り代わって、人々を救い、一番醜いものとして馬の顔としたものを、人々は馬頭観音と呼ぶようになります。人々が牛馬を多く扱うようになり、その幸せを祈り、その病や傷で苦しんだとき、早く治るようになり、また死んだときその霊が安らかにと祭るとき、馬頭観音にすがるなかで、牛馬の仏さんとしたものと思われます。

〔狩野川沿〕

1

下田街道沿いに祀られた年輪を感じさせる石仏である。



2

宮司である遠藤佐近が社の繁栄を祈って齋納したもの。





3
村が広がって新しい村ができ、その境になったところ（上町・下町の境）に祀られたもの。



4
庚申塔である。青面金剛塔は町内でも珍しい。



5

地神を祀ったもので田畑や農作物の安全・村内の繁栄等を村民一同で祈ったところ。



6

農作業には馬は貴重なものでその健康を祈って祀ったもの。

村の辻で縁結びや厄落しなどの行事が行われ祀られていたものだが、二体とも首はコンクリートで補修されている。





村の辻に祀られたもの。

9



頭巾をかぶった単僧像・伊豆型、風化のひどいのは石質のため。

10



11

村内では古い単僧像・伊豆型の石仏だったのか風化がひどい。首は後世に補修されている。



三匹の猿を刻した庚申塔は町内では珍しい。

12



(三 猿)



13

単体・浮彫の道祖神は珍しく、下肥田村と刻としてあるので当時の村の構成を知る貴重な資料である。



14

狩野川を渡る人々の無事を祈って見守っている。



15

どこことなく親しみを感じさせる、頭のくぼみは何かの願かけのためであろう。



16

仏教語を刻した庚申塔である。



17

馬の健康を祈って屋敷近くに石像をたてて祀ったもの。



18

地蔵さんである。刻まれた年号も町内では古い部類であるが保存状態は極めて良好である。



馬に対する愛着心から石像を祀って加護を祈った。

19



伊豆地方でも河津以南で一般的な石祠型の道祖神だろうか。石祠型であれば町内では非常に珍しい。

20



非常に小さな道祖神である。

21



土地や田畑・農作物、村内の繁栄を地神に祈って塔を立てたもの。

22



23

仏法語を刻した珍しい庚申塔。



24

観音像、人々の苦しみを取り去ってもらうため祀られたもの。



25

横道三十三番観音菩薩供養塔である。



26

甲子待塔（きのえねまちとう）である。きのえねの日の夜、大黒天を祀る人々がたてたもの。



27

江戸時代、文化文政の頃は庚申信仰が盛んで村内に庚申塔とだけ刻んだものが多くなった。



28

聖観音像で、狩野川の災害にあった人々を祀ったものである。

29

仏教語を刻した庚申塔で、今回調べた江戸時代の石造物では最も古いものである。



30

西国三十三番は観音の霊地、霊地や観音を参拝した石塔。





文化文政の頃は文字だけの庚申塔が各地にたてられた。

31



首が欠けている石像、大日如来でお堂に祀られていたものらしい。

32



馬の持ち主は日蓮宗の信者で観音と日蓮に加護をお祈りしている。

33



上半分が欠けている立像である。

34



光背をもつ道祖神である。

35



旧下田街道沿いにあった、古い時代に祀られたものらしい。

36



座像の地藏は珍しい。

37

〔狩野川沿〕

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行) cm	建立年代 (西暦・干支) 年月日	設立者	備考及 刻文	所在地
1	道祖神	47×47×24			単体・座像・丸彫・笏持	間宮
2	駒形社	77×55×19	1745 延享二歳 丑八月日	豆州間宮村 遠藤佐近	浮彫・駒形大明神	間宮 神明神社
3	道祖神	56×54×27			単体・座像・丸彫・笏持	間宮
4	庚申塔	104×39×15		間宮村講中	青面金剛塔・富村講中	間宮
5	地神	107×40×24	1836 天保七年 丙申八月日	間宮村講中	堅牢地神尊天・村中講中 世話人・吉田林左エ門・白井用蔵	間宮
6	馬頭観音	60×32×24		富所中 施主・□□□□門 立像・舟光背		塚本
7	道祖神	50×41×37			単体・座像・丸彫・宝珠持、首は近年のコンクリート補修	塚本
8	道祖神	58×27×18(台座含む)	1723 享保八癸 九月吉日	塚本村中	単体・座像・丸彫・宝珠持、塚本村中、首はコンクリート補修	塚本
9	如意輪観音	52×34×21		講中世話人	浮彫・座像・講中世話人 「この他にも左右両側面に刻文あるも判読不能」	肥田
10	道祖神	65×51×37			単体・座像・丸彫	肥田
11	道祖神	58×50×35			単体・座像・丸彫、頭部は後世の補修	肥田
12	庚申塔(宝塔)	146×33×33(台座除く)			三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)、両脇に蓮華	肥田 香徳寺
13	道祖神	68×45×26	1845 弘化二巳年	下肥田村	単体・立像・浮彫、下肥田村	肥田

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行)cm	建立年代 (西暦 年月日・干支)	設立者	備考 及 び 刻 文	所在地
14	道祖神	80×40×28	1798 寛政十馬年 九月吉日	豆州肥田村 講中世話人	単体・座像・舟光背・笏持、豆州肥田村講中世話人 岩和□石エ門・同利八・田中三左門・五左エ門	肥田
15	道祖神	62×59×50			単体・座像・丸彫・笏持、頭部中央窪む	日守
16	庚申塔	90×64×38			○三界唯一心	日守
17	馬頭観音	54×31×21	1842 天保十三壬寅		立像・浮彫	日守
18	地藏	104×26×18(台座除く)	1689 元禄二年 巳巳六月廿四日		右手に錫杖・左手に宝珠	日守
19	馬頭観音	62×30×24(台座除く)	1817 文化十四□ 丁丑三月十日		立像・舟光背	日守
20	道祖神(石祠)	60×48×63			祠内に石珠	日守
21	道祖神	39×29×27 (像21×18×10)			単体・座像・浮彫・宝珠持	日守
22	地神	118×48×40	1857 安政四巳八月		地神尊、安政四巳八月立之	日守
23	庚申塔	128×55×23	元□八年□□ 九月二□		○万法唯一心	日守
24	観音	63×26×23	1689 元禄二ノ耳 巳巳七月七廿			日守
25	巡拝塔	52×24×20	1810 文化七庚午天 二月十有□□		登 供養横道三十三所観世音菩薩	日守
26	甲子待塔	38×26×21	1827 文政十有		下部は欠損し上部のみ、甲子	日守 熊野神社脇

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行) cm	建立年代 (西暦・干支) 年月日・干支	設立者	備考及び刻文	所在地
27	庚申塔	117 × 58 × 48	1804 文化元年 □子四月□		○庚申塔「下部に講中者の氏名数名あり」	日守 東陽院前
28	観音像	62 × 23 × 13			立像・浮彫	日守
29	庚申塔	131 × 63 × 35	1664 千時寛文四申 辰		○庚申 ○三世唯一心	日守
30	巡拝塔	103 × 40 × 23	1753 宝暦三戊寅三月		西国順□・南無観世音菩薩・供養之塔	日守
31	庚申塔	110 × 30 × 30			庚申塔	日守
32	大日如来	52 × 54 × 30			座像、頭部欠損	日守
33	馬頭観音	42 × 20 × 14			馬頭観世音、南無妙法蓮華經	日守
34		36 × 29 × 23	1872 天保三年 寅九月日		立像、上平分欠損	日守
35	道祖神	50 × 30 × 24			単体・座像・舟光背	日守
36		53 × 43 × 30				新田 公民館内
37	地蔵	60 × 30 × 23 (台座除く)			右手に賜杖・左手に宝珠、蓮華台座	新田 明心寺入口

〔仁田宿〕

38

庚申塔とだけ刻まれている。



39

単僧像、光背を持つ道祖神は町内では珍しい。





山仕事に向かう馬たちの無事を祈ってたてたもの。

40



古い村の出入り道にたっている石像。

41



42

庚申信仰の講中がいくつかできて庚申塔の数が増えた。



43

伊豆型で古い石像である。風化もひどいが頭のくぼみは願かけのためらしい。



異なつた辻にあつたものを集めて縁結びや厄落しが行われたところ。

44・45



庚申信仰講中がいくつつか増えたのを物語っている。

46
・
47



〔仁田宿〕

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行) cm	建立年代 (西暦・干支) 年月日	設立者	備考 及 び 刻 文	所在地
38	庚申塔	67 × 33 × 21	1774 安永三年 甲午七月吉日		〇〇 庚申塔	仁田 全得寺
39	道祖神	58 × 33 × 21	1746 延享三寅丙 十一月吉日		単体・立像・舟光背・中啓持	仁田 全得寺
40	馬頭観音	47 × 26 × 22	1803 享和三〇亥			仁田
41	道祖神	48 × 43 × 30			単体・座像・丸彫・笏持	柏谷
42	庚申塔(宝塔)	150 × 30 × 27	1793 寛政五年仲冬		庚申塔	柏谷 養源寺
43	道祖神	56 × 48 × 40			単体・座像・丸彫、頭頂部が窪んでいる	柏谷
44	サイノ神	48 × 30 × 25			単体・座像・丸彫	柏谷
45	サイノ神	40 × 43 × 21			単体・座像・丸彫、首以上を欠損する	柏谷
46	庚申塔(宝塔)	112 × 28 × 28	1789 寛政元年 酉七月□		庚申講中	柏谷 公民館
47	庚申塔(宝塔)	146 × 32 × 30	1740 元文五申年 正月吉日		庚申供養塔 中講	柏谷 公民館

〔畑毛地区〕

48

足利尊氏の信仰の厚かった地蔵とよく似たものが刻されている。
伊豆は当時尊氏の領国だった。



（梵字・阿弥陀如来）

阿弥陀三尊像である。向かって右は本来観音菩薩であるが馬頭観音、左が勢子菩薩である。



町内では最も丁寧につくられた道祖神である。





(指・紐)



(背中の帯)



(衣服の模様・菊綴まがい)



51

古い村の主要な出入り口に祀られたものである。

庚申塔が二基あるのは講中が二つ以上あったことを示している。

52・53





伊豆型の道祖神で首を欠いている。

54



平井の庚申塔(63)とともに日輪・月輪を刻し、卍(マンジ)、さらには数行に及ぶ願文が刻されている。

55

〔畑毛地区〕

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行) cm	建立年代 (西暦・年・月・日・干支)	設立者	備考及び刻文	所在地
48	磨崖仏		1382 永徳二年		梵字(キリク・阿弥陀如来)	畑毛
49	阿弥陀三尊像本尊	120×50×46(臺下段の台石除く)			蓮華台座	畑毛 正法院入り口
	左脇侍	59×37×28(本尊に同じ)			蓮華台座、施主……	
	右脇侍	66×34×31(本尊に同じ)	1756 宝暦六丙子 八月吉日		蓮華台座	
50	道祖神	55×52×27			単体・座像・丸彫・笏持 指、着衣(紐・帯・菊の模様)等極めて丁寧な造り	畑毛
51	道祖神	52×36×39			単体・座像・丸彫・笏持	畑毛
52	庚申塔	90×61×23			庚申塔	畑毛 東光寺跡
53	庚申塔	83×46×31	1800 寛政十二年 三月八日		庚申塔・願主敬白	畑毛 東光寺跡
54	道祖神	47×38×24			単体・座像・丸彫、頭部欠損	畑毛 東光寺跡
55	庚申塔	140×78×24	1680 庚辰宝八年 □春十二月	願興寺	元、〇、〇(マンジ、日・月輪)他は解説編参照	畑毛

〔日金路〕

56

日金参りの起点で人たちを見送って何年になるだろう、その年輪を感じる石仏である。



57

日金の山路にかかる第一歩、人々を優しく見守って何年か過ぎた石仏。



58
60

日金路の交通運搬の手段には馬にたよることが多かった、馬の健康を祈ってたてたもの。



61

非常に小さなサイノ神で珍しい。村中をひきまわしたのかもしれない。





滝を神格化し、お参りの場所を示した石像。

62



畑毛の庚申塔(55)とともに日輪・月輪を刻み、数行に及ぶ願文が刻されている。

63



64

灯籠型の庚申塔は町内で唯一、63の庚申塔との関連が窺える。



65

世話人が馬持中と刻まれた珍しいものである。



祠内に山ノ神社の木札がおさまられている。

66



講中が二十四人と刻まれた珍しいものである。

67



68

もとは日金参道に面した場所にあつて日金参りの人たちが参拝したものであった。



69

日金路の周辺には古代遺跡が数多くあるがそのうちのビンノ沢遺跡から出土したといわれる。古代人の信仰に使われた陽根である。



地の神を祀り村内共同祈願の対象となり村の辻や田畑のほとりに
祀られたもの。

70



村はずれにたてられて日金参拝の人々がお参りしたもの。

71・72



73・74

明治の始めごろまで多くの人たちが往来した旧丹那路をみおろす位置にあって道中の無事を祈っている。



75

農家の休憩時、伯耆（昔の獣医）により馬の体調を整えた所にてられた馬頭観音。この辺を馬作り場といった。



伊豆東海岸方面から東駿地方へ往来する人たちのための道しるべ。

76



頭巾を被り眼・口を朱で彩どる。単体像で大日如来といわれている。

77



78
修験者を形取った珍しい石像である。



79
庚申信仰は色々の系統があるがこれは仏教系統で町内では数少ない庚申塔である。



双体の道祖神は日金参道の山間部にある珍しいもので縁結びの神といわれている。

80



伊豆型といわれる伊豆地方特有の道祖神であるが、このあたりでここ一つだけはかえって珍しい。

81



82

火事と盗人の皆無を祈願して祀ったもの。高根大権現は十一面観音菩薩像でもあるといわれている。



83

日金参拜路に面した場所にたて縁結びや厄落しの場でもあった。



(鶏)



(猿)

庚申の名前を刻まないで仏教語の文字を刻み、下部に猿、側面下に鶏を刻した珍しい庚申塔である。



85

如意輪観音である。日金参道の傍らにあり参拝者の苦しみを取り去ってくれるといわれる。



86

日金参拝路の傍らにあって参拝の善男善女に優しく微笑みながら見守ってしてくれる。



87

武人騎上姿を刻した石像で遠く相模や駿河の馬持ちの人々の信仰が厚かった。



88

村の入口であり主要なる出口でもある場所になっている。双体の道祖神で立像の刻みや年号が鮮明である。



89

田畑農作物や村内を守る神として祀られお祈りをしたところ。

〔日金路〕

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行) cm	建立年代 (西暦) 年月日・干支	設立者	備考及び刻文	所在地
56	道祖神	43×32×15			単体・座像・浮彫・中啓持	大土肥
57	道祖神	56×42×38			単体・座像・浮彫・笏持	大土肥
58	馬頭観音	66×29×19		大場村・九左		大土肥
59	馬頭観音	58×26×19	□寅天□…		立像・舟光背	大土肥
60	馬頭観音	47×26×16			立像・舟光背	大土肥
61	サイノ神	20×19×14(台座除く)			丸彫・座像、非常に小形	平井
62	馬頭観音	57×32×18	1836 天保七		舟光背・立像	平井 不動滝脇
63	庚申塔	167×80	1680 延宝八庚申年 正月	円覚末寺 宗山妙旦	○、○、○(日・月・輪)、他は解説編参照	平井 不動堂脇
64	庚申塔(灯籠型)	155	1700 元禄十三 庚辰歳七月	正仙院 「他多数」	元禄十三庚辰歳七月、庚申修願衆徒 正仙院「他多数」	平井 不動堂脇
65	馬頭観音	66×24×13	1847 弘化四未 七月十日	世話人馬持中		平井
66	山の神(石祠)	44(台座除く)			山の神、祠内に山ノ神社の木札あり	平井
67	庚申塔	213×80	1740 元文五庚申年 十月日	講中二十四人	○○ 元文五庚申年、十月日、講中二十四人 庚申供養塔	平井 養徳寺
68	地蔵	140×65(台座除く)			左手に宝珠	平井 養徳寺

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行)cm	建立年代 (西暦・干支) 年月日	設立者	備考及び刻文	所在地
69	石棒(四本)	(長×高) 100×13 90×15 18×10 13×8.5	1858 安政五年 二月〇日建立		いづれも残存部の大きさを示す	平井 養徳寺
70	地神	100×67			堅牢神	平井 根岸坂下
71	道しるべ+道祖神	42×32×16			右あたり、左……	平井
72	道しるべ+道祖神	44×31×18			……、……	平井
73	地蔵	52×16×11			丸彫・立像	平井 柿沢
74	地蔵	22×12×9			丸彫・座像	平井 柿沢
75	馬頭観音	54×32×20	1839 天保十亥年 五月吉日		舟光背・立像	丹那
76	道しるべ+道祖神	33×28×13	1812 文化九申 八月十八日	丹那村吉蔵	右……左……願主丹那村吉蔵、浮彫・立像	丹那
77	伝・大日如来像	44×26×19(台座除く)			単体・浮彫 目・口その周りに朱塗りがされている	丹那
78	サイノ神	43×32×23			鉢巻、修験者の形態を示している?	丹那 八嶋神社
79	庚申塔	88×29×23(台座除く)	1720 享保五年庚子	豆田方郡 丹那村	青面金剛明王	丹那
80	道祖神	65×42×25(台座除く)			双体・立像・浮彫、右側は笏持、左側不明	丹那
81	道祖神	48×33×30			単体・丸彫、頭部中央大きく窪む	畑

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行) cm	建立年代 (西暦・干支) 年月日	設立者	備考及 刻文	所有地
82	石祠(高根大権現)	(石札)17×9×6	延享四年丙寅 四月十六日	☐ 社造 ☐ 當有	火盜・潜消、奉請高根大権現 本地十一面觀世音菩薩	畑 皇座神社
83	道祖神	71×55×24			双体・立像・浮彫	輕井沢
84	庚申塔(宝塔)	125×24×22			三界唯一心・猿(側面に蓮華と鶏)	輕井沢
85	如意輪觀音	57×50×38(台座除く)			蓮華台座	輕井沢 泉龍寺内
86	地藏	69			右手錫杖・左手宝珠	輕井沢 駒形堂脇
87	石像(馬)	91×76			浮彫、烏帽子・単衣の人物を乗せる	輕井沢 駒形堂内
88	道祖神	60×46×50	1717 享保二年	田代村	双体・立像・浮彫	田代
89	地神	140×90×60	1861 文久元年辛酉年 五月吉日		梵字(ア・胎藏界大日如来)、地神尊・村内安全	田代

〔箱根路〕

90

眼の悪い人たちが信仰したといわれている。



91

馬の健康を祈ってたてたもの。





92

たま沢とは妙法華寺を指す、妙法さん参りへの道しるべ。



93

単体座像は平坦地域に多い形で風化がひどいが、頭のくぼみは願かけのためできたもの。



箱根と玉沢道の分岐点で道しるべの役目もしている。

94



荒神さまは火の神で、石像の朱は主に火を示す。

95



96

菲山旧街道にたてられている。



97

箱根路には珍しい双体の道祖神で縁結びや厄落しに願かけした神
さまである。



橋のたもととは人の集まるところ、地神を祀って農作物や村内の安全を祈った場所。

98



馬の健康を祈ってたてたもの。

99



縁結びや厄落しを行うためたてたもので風化がひどい。

100



丹那のそれ(79)とともに青面金剛王と刻まれている。

101



102

唐破風の庚申塔は今回の調査では唯一のもので、畑毛(55)平井(63)の庚申塔と同じく数行に及ぶ願文が刻されている。



(三 猿)



103

農作物、田畑の守りや村内の安全を祈って、人々の集まりやすい橋のもとに祀ったもの。



104

修験道の行者達の修行の跡である。

三島市方面から日金、熱海への街道への道しるべ。



(右側面)



106
滝に不動明王を祀ったものである。



107
寺社城の境界にたてたもの。



108
寺域の境界を示すもの。



109
聖観音である、女性の信者が多いと言われている。



仏像を内蔵した珍しい形の塔。

110



箱根路の急坂にかかる場所に愛馬の安全加護を祈ってたてたもの。

111



112
箱根路の峠にかかるところに馬の安全加護を祈ってたてられたもの。

〔箱根路〕

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行) cm	建立年代 (西暦) 年月日・干支	設立者	備考及び刻文	所在地
90	サイノ神	50×45×36			単体・座像・丸彫・笏持、目をえぐられている 道路東側下にあったものを西側上に移動している	上沢
91	馬頭観音	45×24×18			一部後世の補修あり	上沢
92	道しるべ+道祖神	60×24×20	1843 天保十四癸卯 二月日		右やま中・左たま沢江	上沢
93	道祖神	60×50×30			単体・座像・浮彫、目・頭部の窪み著しい	上沢
94	道祖神	55×40×30			単体・立像・浮彫	大竹
95	荒神(不動明王)	66×33×24			朱が施されている	大竹
96	道しるべ+道祖神	73×36×33		桑原村	右ひがね道・左はこね道 単体・立像・浮彫	桑原
97	道祖神	53×35×21	判読不能		双体・立像・浮彫	桑原
98	地神	125×87×60	1859 安政六巳 八月吉日		○地神尊・村中安全	桑原
99	馬頭観音	55×23×23	1819 文政二巳 卯□月		立像・舟光背、刻文あるも判読不能	桑原
100	道祖神	50×55×30			単体・座像・丸彫・笏持	桑原 熊野神社
101	庚申塔	80×30×18	1800 寛政十二庚申年 十一月日	村中	青面金剛明王、村中立之	桑原 熊野神社
102	庚申塔(唐破風)	138×29×26	1680 延宝八年		下部に三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)、両側に蓮華、願文の刻、前面に多くあるも判読不能	桑原 熊野神社

番号	形態・名称	寸法(高×幅×奥行) cm	建立年代 (西暦・干支) 年月日・千支	判読不能	設立者	備考及び刻文	所在地
112	馬頭観音	105 × 37 × 26				梵字・三面観音、建之、箱根石 吉話人・兵治良・嘉兵エ	箱根峠
111	馬頭観音	64 × 30 × 21	1774 安永三 十二月初八日 甲午年				桑村 馬坂
110	霊廟形	(50×50×44) (32×32×22) (17×39×39) 上中下				円窓・角窓、仏像を内蔵、台座正面に階段刻む	桑村 高源寺
109	聖観音	93 × 73				浮彫・座像	桑村 高源寺
108	地藏	59 × 30 × 15	1755 宝暦五 二月吉日 乙亥			船山境界地藏菩薩	桑村
107	馬頭観音				高源寺	馬頭観世音菩薩・高源寺立之	桑村
106	不動明王	像高不明				石祠の中に収められている	冷川 不動滝
105	道しるべ(たまご型)	55×径40				左あたみ道、右やま道、頂部中央及び4ヶ所に窪み 右側にも右やまみち・左やまみち、とある。	桑村
104	山の神	80 × 40 × 15					桑村 山神社
103	地神	130 × 90 × 20				堅牢地神、図家、永寧	桑村

はじめに

昭和十六年、私は函南小学校六年を卒業した。上沢の大洞山から徒歩で通学していた。日曜日になると、露木稔先生（現函南町教育長）たちと、日曜学校へ行き、幼き知性を研ぎ、悪戯を繰返した。



斎神（さいのかみ）祭 〔北越雪譜〕

一級上には、青木新一先生（旧姓幸野・元沼津市立大岡小学校長）がおり、いろいろな面倒を見て戴いた。

私たちは互いに教職の道に進み、校長会議の後など、ドンドン焼きの思い出に花が咲き、当時を懐かしんだものである。小学校四年ごろになると、もうその行事の準備に参加する。私は五番組の仲間に入れて貰い、学校の帰りに幸野家の物置に行き、まず縄を作るところから始まる。足踏み回転式縄ない機とかで、藁を二本づつ手渡すのである。

この縄づくりからスタートし、すべて自分たち子どもの手でサイの神祭りを執行した。命令は高等科二年生から出される。オンベ竹を貰ってこい。命令が出たら行動に移る。五番組では、幸野、渡辺、竹沢、露木、大川さん等、竹藪所有のお宅から順に頂いたと青木先生は思い出す。このオンベの爆竹音だけでは、物足らぬので真竹を短かく切って入れると中国式の爽快な爆発音が続く。真竹を盗ってこいと命令が出る。ある年、豊竹さんの竹藪の真竹を集中攻撃したところ発見されて、「黙って伐るとは何事ぞ」と雷を落とされた。このようにして、私たちは社会生活のルールを身につけて行った。考えてみれば、ドンドン焼きは、人を一人前にするための教育者でもあった。

オンベ竹を中心に、ダルマや正月飾りをつけ、笹竹で周囲を囲み寝泊りできる小屋をつくる。不寝番はオンベの綱切りにやって来る

他部落の侵入者を防止するためである。上沢からもお飾りを戴きに遠征する。平井やハツ溝、大土肥まで出かける。収穫が少ないと帰りに田んぼから稲ムラの藁を引き抜いてくる。当時の大人は寛容だった。年に一度の子どもの祭り、サイの神の行事だからと、見て見ぬ振りをしてこのような行為を許していたのである。こうして苦勞して完成した藁小屋に小学生は、僅か数分間入ることを許された。すぐ出ると命令される。そこは神秘の世界だった。

「ドンドン焼きは十四日／お猿のおけつはまっかっか／」正月十四日か十五日の早朝、夜明け間際、上級生の大声が部落内に響く。「火をつけるぞー」、花まつりで作った団子三つをつけた枝を肩に、弟の手を引き、書初めをポケットに振じ込み、わくわくしながらサイの神の祀られた現地へ向かう。このときサイの神を火中に入れたかどうか記憶は薄い、青木先生はサイの神の横で燃やしたので投入したという。上沢五番組のために一年間、災厄を背負ってきたのだから、穢い浄めるための投入だという。

朝空を炎々と焦す神の火に、子ども心が燃える。書初めが高く舞い上る。字が上手になると喜ぶ。背後の大人達は、オンベ竹の倒れた方向で吉凶を占っていた。今年は豊年満作、台風も少ないぞ／持参の団子が炭のように焼け焦げる。これを食べると病気をしない。竹の燃えさしを縄に移し各家庭の囲炉裏まで持ち帰り火を起こし、キセルで煙草を吸う、子ども達にも、虫歯にならぬぞのめ／とキセ

ルが廻る

サイの神は子どもの神である。大人がさわれると罰が当たると信じられていた。だが残り火の後始末は、私たちが登校後、きちんと処理していた。口や手を出さず目で見守る社会規範がそこにはあった。上沢の曳車については「多分、丹那トンネルが開通する頃まで曳いていた」と青木先生はいう。このようなサイの神が六体、現存していると「上沢誌」には記してある。平成元年十一月二十九日、このサイの神に再会すべく四十八年ぶりに現地をうろついたが、わからなかった。露木先生にお聞きしたが、確たる位置は不明とのこと。

十二月六日再度尋ねる。山裾を歩くことにして幸野家の前を右折する。町道上沢九〇号線の擁壁が崩れている。ふと前方を見ると枯ススキの中に何やら白いものが見える。近づくとこれぞ探し求めたサイの神だった。前回道標道祖神にめぐりあった目と鼻の先である。山道と町道とが交差する地点に、ひっそりと座していた。高さ四〇cm、奥行二五cmの丸彫座像である。全身に白苔が生え、頭のくぼみと両眼のくぼみが痛々しい。鼻や口は欠けて面影をとどめない。頭巾を冠り垂れがうしろにさがる。両手は重ねて笏を持っているようである。

半世紀ぶりの対面である。幼いころの上沢が蘇る。ドンドン焼きの水田は既に埋めたてられていた。残っていたのは、自然と山道とサイの神だけになってしまった。



上沢5番組のサイの神

一、サイの神

平成元年、函南町教育委員会が主体となり探訪、採録した路傍の石造物は、総計百十二基である。その内訳は別添の所在図のとおり

- 1、狩野川沿い 三十七基
- 2、箱根路 二十三基
- 3、日金路 三十四基
- 4、仁田、柏谷、畑毛等、 十八基となっている。

そのうち、サイの神（道祖神）や道しるべ道祖神は、四十に達し、路傍の石造物の三十六%にあたる。サイの神が函南町の各村々に深

くかわりのあったことを如実に示す数値である。

当町のサイの神については、古くは昭和十六年刊行の武田久吉著『道祖神』で紹介され、最近では函南中学郷土研究部が、鈴木勝彦先生の指導により町内全域にわたり「文化財を守ろう」、「道祖神」と書かれた標識を建てられ、文化財愛護活動を実戦され、各種団体もこれに呼応した動きが見られる。また昭和五十一年と同五十三年に刊行された吉川静雄著『伊豆のサイの神』前、後編の中で、吉川先生は、函南町所在のサイの神三十八基を、一基づつ丹念に踏査されて、調査結果に解説まで加えておられる。

先学の学思に対して、心から感謝し敬意を表する次第である。私は金石史料特に石造物については、専門外のため、己れが不明を恥じるのであるが、吉川先生のご著書を片手に、自分の足で歩いた感想の一端を、述べてみたい。

路傍のサイの神は、千差万別である。このことはサイの神には法則がないことを意味する。仏像製作とちがって製作条件が自由なので、その可否は石工の腕次第ということになる。吉川先生とサイの神採録に同行された、上沢在住の増田満先生（三島市立長伏小学校長）は、函南町や北伊豆のサイの神は、長野県（信州高遠）の石工の手によるものが多いのではないかと推定されている。

路傍の石造物には、製作者名は刻されていない。ただ町内を踏査すると非常に類似したサイの神の多いことに気づく。このことは同

一集團の製作を意味する。そこで増田先生は、高遠藩の石工たちが仲間と共に伊豆にも定宿を根城として、石仏づくりに従事したのではないかと推理する。貧しい山国の高遠藩にとっては、石工の旅稼ぎによる外貨の収入は藩財政に多大な影響を与えた。石工の中には作業中は香を焚き、経文を口ずさむ者もいたというから、その心情が、三百年後の今も胸を打つのであろう。

サイの神の頭の冠物も多種多様である。たとえば、頭巾型（間宮1・3、上沢90、柏谷44、肥田10）、有髪型（畑毛51）、頭髪を束ねる型（下丹那78）そして僧形である円頂のお地藏さん型（仁田・田口文蔵氏宅）等で、石工のイメージが優先する。吉川先生は「神にふさわしいものを頭に冠っている像は、田方郡内には殆どない。見よう見真似で次から次へ伝わっていったものであろうか。装束において同様である。」とされている。

長い年月、風雨に叩かれ子どもに遊ばれ、ドンドン焼では火の海へ投げ込まれ、見るも痛々しい表情が多いのがサイの神である。町内の美男？神は、畑毛の岩崎晃氏宅への路傍に佇むサイの神と吉川先生は推奨なさる。「丸彫の単神座像、お顔の表情は極めて柔和で近くの像とは比べものにならず、町内の優品である。」と。私の訪づれた平成元年十一月十日の午後は、ベレー帽を冠り赤い涎掛けをし、像前にはミカンが供えられていた。よく観察すると像の背面には「昭和二十七年再建」と刻されている。このことを岩崎氏に伺う

と「江戸時代のサイの神は、道路工事の際、地下に埋まっていたので、昭和の石工により再建した。」とのことであった。再建後三十七年経過すると、江戸時代の面影を宿することを知り、貴重な体験となった。

顔の表情において大切な部分は両眼である。静かに瞑目している方が、大きく見開いているサイの神より親しみが湧く。童画のような目をしたのが頭部は後世の補修である肥田のサイの神（11）である。それにしても上沢（90）や日守石堂橋（35）のサイの神の両眼は痛々しい。棒でつつかれたので、深く凹む。眼病平癒の信心が、目の悪いのを治す祈願のためにこうして両眼をつついた結果なのである。

サイの神が神であるためには、直衣（天皇や貴族の日常服）や狩衣（狩装束）の服装が想定できる。襟の線が、首の線に沿っている。この衣装が狩衣でなく法衣となると僧形であり仏式である。襟の線は着物と同じように斜めになってくる。装束では畑毛の本村の道治いにある神像のサイの神（50）を吉川先生は極めて珍しいと推奨しておられる。それは「衣紋に菊綴まがいの紋様を点在させており、これは石工の計いで作ったものと思うが、衣装に紋様のあるのはこの一体だけである。さらにこの像の下には結んだ紐が見えるし、背面には帯が廻っており、背後まで細工をしているのは数少ないことで、石工の良心というか凝り性というのであろう。」と、これとは

反対に『柏谷七組のサイの神(44)』は、衣紋に線を数本つけてあるのは、意味のないことであり、小細工を施さない方が、感じがよい』と感想を述べている。同様例は下丹那にもある。八島手神社境内のサイの神(78)の衣の腰のつけ方は、ユニークすぎる。

サイの神は、手に笏・宝珠・中啓・剣・盃・御幣・巻物等を持つ神と、合掌する姿とに分けられる。

神像であるから、両手で笏を持つのが正常のサイの神の姿であろう。笏は、束帯着用の際、右手に持って威儀を整えた板片である。もとは裏に紙片を貼り、儀式次第などを書き記したもので、上辺は円弧を描いている。函南町でも、全地区に渡って笏を持ったサイの神にお目にかかれる。この笏の持方が面白いと、吉川先生は指摘なさる。『両手を重ねて持つ、右手を上左手を下にして持つ。この反対の左手を上にする持方の三種類ある』とのこと、実に細やかな観察眼であり、結論的には両手を重ねた持方が正しいようである。

吉川先生の踏査では、推定を含めて、十五基が笏を持てるとされている。

僧侶の持物のひとつに檜扇と中啓がある。檜の柾目の良材を薄く剥いだ薄板で作られたのが檜扇である。中啓は扇のおやばねの上端を大きく曲げて外へ反らし、畳んでも半ば開いているように作った扇である。僧具として平安時代後期あたりから、中啓の方は室町時代以降江戸時代から用いられたようである。両者共に実用品ではな

く、僧侶が威儀を正すために、寒暑の別なく用いられている。さて、函南町のサイの神の持物の中に、この檜扇、中啓を持った姿が認められるのである。

吉川先生は、中啓像を仁田の全得寺のサイの神(39)と、大土肥のサイの神(56)をあげられ、扇像として彫ったかも知れないとして日守中里のサイの神をあげられている。

このことは、サイの神の持物により笏を持った神像系と、中啓を持った仏像系とが存在することになり、同時に、衣装も狩衣を着用した神像系と、法衣を着用した仏像系とがあり、いつのまにやら、神と仏が入り混ってしまったことを示している。

函南町のサイの神の持物には、笏が一番多いようであるが、両手に何も持たず、両手を胸前で合わせて敬仰する合掌サイの神も七基ほど所在する。

合掌手の仏像は、法隆寺金堂九号壁の弥勒浄土の両脇侍像をはじめ、著名なのは、東大寺三月堂本尊の不空絹索観首像や、両脇侍の日光・月光像等に見られる。

従って、合掌するサイの神も、仏像系であり、路傍に見つける可憐な合掌像は、いつまでも、印象に残るのである。

サイの神では、両手に何も持たない場合は合掌するか、袖の中に両手を包み込むかの、いずれかである。

つぎは、両手に宝珠をのせたサイの神である。読んで字の如く、

宝物とすべきたまである。宝珠については仏典にいろいろの解釈があるようであるが、万事思いのままに念願が叶えられる宝のたまを意味する。両手で宝珠を捧げ持つ例として、法隆寺金堂の釈迦三尊の両脇侍や、夢殿の救世観音等が胸前に両手で宝珠を捧げ持っている。特に吉祥天女とか弁財天等、一群の天女像に宝珠像が多く、総じて観音系統の像と、地蔵尊に多いことが注目されている。

函南町のサイの神においては、塚本の二基（7・8）と肥田の一基（14）日守の一基（21）が両手に宝珠をのせている。

日守の宝珠をのせたサイの神と並んで、町内では珍しい石祠があった。伊豆も天城を越えると、石祠がサイの神となっている地域が多くなる。御神体には石棒もある。しかし、日守の石祠には祠内の奉齋物に尖った石を祀っている。石を神体として祭った祠を石神という。石神さんをめぐる祈願には、良縁・安産・病氣治癒等がある。土地によっては、石神（シャクジン）ともよぶ。日守の小祠は、どのような由来をもつものであるうか。

函南町をはじめ、北伊豆地方のサイの神の持物は、笏・宝珠・中啓・巻物等であると、吉川先生は指摘なさっておられる。

神像にしても、仏像にしても所定の持物を左右いずれの手に持つべきかということなど、私たちの日常生活にとっては、どうでもよいことである。

しかし古くは厳然と区別されていた。インド人の今に伝わる左手

尊重の慣習などその証左である。

函南町のサイの神を見て、一番わかりやすいのは、持物である。神像系の笏が十五基、仏像系の合掌・中啓・宝珠が十三基、その他は判じ難いと、吉川先生は『伊豆のサイの神』の中で記述されている。そして、いつの時代かサイの神であるべき、神像が、仏像にさがまがわりしていると結んでおられる。この持物ひとつみても、如何に自由にサイの神の造像がなされたか、わかるような気がする。

双神像（双立像・双体像）についてみると、サイの神には、一人の単神像と、二神の双神像とに分けられる。北伊豆田方郡内には、双神像は僅かに五基である。そのうちの四基が函南町にある。

1、田代の双神は享保二年、酉十月の記年銘がある。武田久吉著『道祖神』には、「伊豆に於て斯かる逸品の存在することは、一驚異であると言えよう。左右同形であり、手は合わせているが、冠を被る神像であるにも抱わらず袈裟をつけている点が妙である。」と、この点を吉川静雄著『伊豆のサイの神』では引用されている。

2、桑原日影の双神像の建立年代は判読不明である。ブロック造りの祠内に曳車と共に祀られている。二神の笏の持ち方が異なり、装束も分かれ男女両性を表わす立像である。

3、丹那新山の双神像、碑石は「起型」浮彫、右神は笏を持つが左神は両手部分が磨耗して不明、端正な立像である。

4、軽井沢の双神像は、像にも碑石にも白い苔が生えており、磨耗

ひどく細部の判別はできない。その位置は道路改修工事の折に移動したと伝えられている。現位置は軽井沢駐在所前である。

現在伊豆の国では吉川先生により十六基の双神像が確認されているが、その中で函南町に四基もあるのは、貴重である。吉川先生は「双神の二体は、男女をあらわし、その姿態の変化もさまざまである。伊豆の双神は謹厳である。正面を向いて並び密着しない。共に合掌するか、笏をもっている。型破りは、三島市沢地の双神である。左神は右神の胸乳に手をあて、右神は左神の股間に手をのばしている。この双神への願いは、生殖・増産・縁結びを求めていることであろう。」とされている。

私たちは、四基の双神像を、その希少的価値において、その謹厳さにおいて、函南町の誇とすべきである。

サイの神が、いつごろ造像されたかは、多くの神像に紀年銘がないので、不明である。函南町では、九基に紀年銘があった。比較しやすく、西暦年で列記すると次のようである

- | | |
|------------|------------|
| ① 一六七六（日守） | ② 二七一七（田代） |
| ③ 一七二三（塚本） | ④ 一七四六（仁田） |
| ⑤ 一七九六（塚本） | ⑥ 一七九八（肥田） |
| ⑦ 一八一二（丹那） | ⑧ 一八四三（上沢） |
| ⑨ 一八四五（肥田） | |

これからみると、最古は日守の像であり、あとは一八世紀初頭から

一九世紀中ごろまで、一五〇年間にわたっている。

田方郡で最古の紀年銘は、函南の一六七六年、ついで葦山の一七〇三年である。三島の最古である一六八六年の紀年銘より十年早く造像されていることになる。

尚、吉川静雄著『伊豆のサイの神』の中で「日守の中里のサイの神像の背面には、延宝四年（一六七六）四月穀旦とある。穀旦とは「吉日」の意である」と記述されており、本像の特色を指摘されている。

柏谷七組のサイの神二体の中の一体は、元文五年（一七四〇）の造立であると佐藤信義氏は函南町の歴史研究会で述べていると吉川先生は記されている。造立年としては突出してはいない。

田代の鈴木庫雄氏は、函南町の「歴研」で、「古老の口伝では、享保年間に、痘瘡とコロリ病（赤痢）が流行し、各部落ではサイの神を村の入口に祀り、災難除けの祈願をした」とのことである。因みに、享保年間とは、一七一六年から一七三五年までである。

サイの神の造像については、山田宗睦著『双体道祖神年表』により「宝歴（一七五一〜一七六三）のころより始まり、寛政（一七八九〜一八〇〇）から化政期（一八〇四〜一八二九）にかけてサイの神の造像は多くなる」との一般論を参考としたい。

上沢のドンドン焼でも述べたが、サイの神は子どもの神で、大人の願いが込められ造立された。前記の柏谷の佐藤信義氏の話にもあ

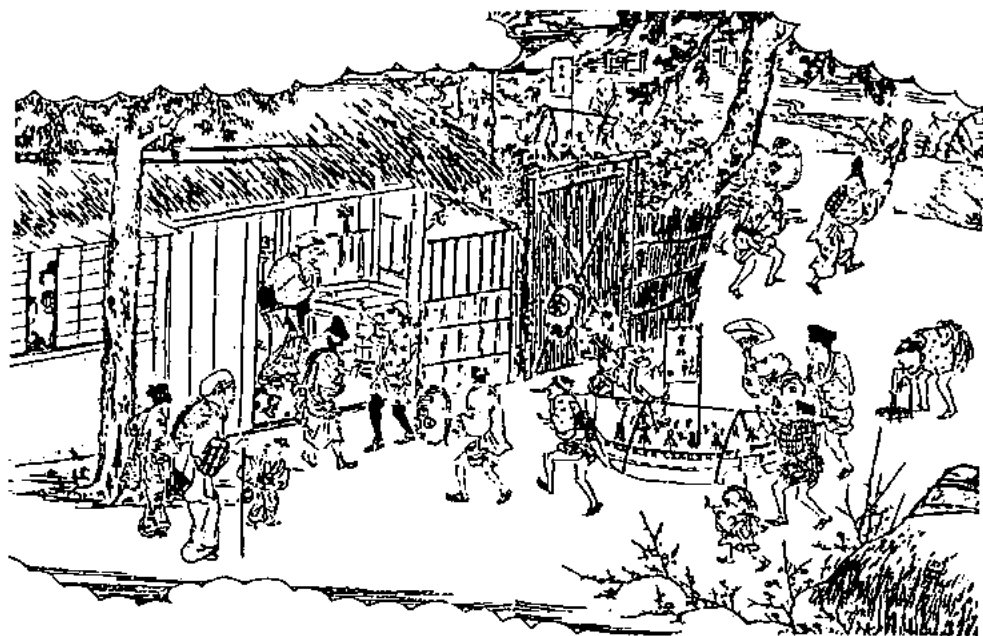
るように、元文四年に、子どもの疫病が流行し多くの子どもが亡くなった。それは子どもの神さんであるサイの神が、村の下の方の「歳の神道」にあるためであろうとして、上組に移すと共に、更に一体を新らしく造って祭った。子どもが誕生すると、父親はサイの神におまいりして、無事を祈願し、そして産土神にまいるのを恒としている。

田代の鈴木庫雄氏も、疱瘡と赤痢の流行をあげている。

要するに、子どもにとっては、疱瘡（天然痘）は防ぎようのない病気であった。この災厄を防ぐ唯一の方法は、部落の中にこの流行病が侵入してくるのを防ぐ目的をもって、サイの神を部落の入口に造立したのである。

双神サイの神は、生殖・増産を担当し、単神サイの神は、天然痘予防と子どもを健全に育てることを祈願して造立された。伊豆の双神は謹厳である。とするならば、両者を兼ねたものであるかも知れない。

隣の部落の「サイの神」造立の話は、全村に広がって行く。かくして函南町全域にわたって、村や部落の入口に、「サイの神」は誕生していったのであろう。そして、ドンドン焼は年中行事の一つとして、大切に守り続けてきた。いつの日か、子どもがこの行事を担当してきた。



道祖神祭〔江戸名所図絵〕

県史では、「かつて大人の習俗であったものが、儀礼が素朴でありながらも大袈裟なものに変わっていった時、子どもが大人にかわって主役となることはままあった。大人の願いが公言するにしていはいささか誇大すぎれば、子どもに出演が求められた。」と。大人がやるにしているあまりに無邪気なものであるだけに、村人にかわって子どもが代行したのがドンドン焼である。

サイの神は、道祖神あるいは道六神（道陸神）ともよばれる。

道祖神はいろいろな信仰を含んでいる。旅の神、あるいは道の神と考えている人も多い。また村の入口や峠などに祭られているところから、村境を守る神、悪魔を追ひ払う神ともされている。江戸時代中期以降は、民衆の社寺参詣が盛んになり、村の入口や岐れ路などには、道しるべが多く造られた。

今回採録されたサイの神（道祖神）には、道しるべの案内が見られた。

- | | | |
|--------|--------|------------|
| ①上沢 | 右やま中、 | 左たま沢江（92） |
| ②桑原 | 右ひがね道、 | 左はこね道（96） |
| ③丹那 | 右？ | 左？（76） |
| ④平井（右） | 右あたま | 左？（71） |
| ⑤平井（左） | 右？ | 左？（72） |
| ⑥桑原 | 右やま道、 | 左あたま道（105） |
- 道しるべには、⑥のように道案内だけ記したものと、ほかの目的

で立てたサイの神や、石仏、石塔類に道案内の銘文を併記したものがある。前者を「道標」後者を「複合道標」という。

函南町にのこる道しるべ複合道標は、サイの神に併記することによって、更に功德を得ようとする村人の信仰心によって立てられたものである。

サイの神は、道行く人なら誰でも守ってくれるわけではない。サイの神は必ず特定の人びとによって祀られ、その人びとを守ってくれる。『県史』では桑原についてこう分析する。

「桑原の本村は大きく二つの村組に分かれている。それを日向と日影というが、サイの神は日向と日影とで一カ所ずつ祀っている。日向の神は現在氏神の入口にあるが、以前は南からの道路が日向に入る地点にあった。また日影の方は、その道路が日向に入る前に分かれて日影に入ろうとする橋を渡った地点に祀られている。いかにも二組に分かれて、自分の組だけの神として祀っているように見えるが、この二カ所の地点は桑原本村に南方から入ってくる時の入口であり、桑原全体の境といてよいのである。つまり部落内を、サイの神は分担して、人々を守ってくれるのである。」

吉川静雄著『伊豆のサイの神』の中では、「現在サイの神は、野ざらし、雨ざらしになっている。桑原日影のように、ブロックの祠に祭られている例は特別である。」

本来サイの神は、部落に災厄の侵入を「サエギル」役目を持って

いるので、部落の入口が祭場である。それが道路事情により変化し、本来の場所から離れてしまっている。また、サイの『神』であるのに、神がいつの時代からか僧形になったり、地藏型になったり、宝珠をもったり、寺の境内に入ったり、神と仏の習合の姿となったのが、サイの神である。」と、結ばれている。

間宮上町五組の杉山自転車店のご主人と話す。「惜しいことでした。昨日十一月十四日がこのサイの神のお祭りで、にぎやかにやりました。」とのこと。見ると生花が咲き誇り、祭りの供物などもあるが、函南町と三島市大場との接点にある道祖神が、土地の人々により今もドンドン焼きを始め、民間信仰の行事を実施していると伺い、安心もし感動もした。

同様に間宮下町のサイの神も、上町と像容が双子のように、似ているがこちらにも美しい花が飾られており、お祭りがあった様子が伺えた。サイの神の民間信仰が、平成の世も引き継がれて行くことを、心から祈りたいものである。

二、庚申塔

今回の採録で、丹那、軽井沢、平井、畑毛、柏谷、仁田、間宮、肥田、日守から二十基の庚申塔が確認できた。六十年あるいは六十日ごとに巡ってくるのが、表1のような五行十干十二支による庚申

(表1) 五行十干十二支配当表

水	金	土	火	木
のえ甲子	のえ乙丑	のえ丙寅	のえ丁卯	のえ戊辰
のえ己巳	のえ庚午	のえ辛未	のえ壬申	のえ癸酉
癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯
癸巳	壬辰	辛卯	庚寅	己丑
癸卯	壬寅	辛丑	庚子	己亥
癸丑	壬子	辛亥	庚戌	己酉
癸亥	壬戌	辛酉	庚申	己未

(かのえさる)の日である。この日は、「人間の体には、三戸の虫(人の腹に在るといわれる三匹の上戸・中戸・下戸、背面金剛明王の部下)が棲み、毎日毎夜人間の行動を監視して、六十日に一度やってくる庚申の晩には、人々が寝静まるころを見計らって人体を抜け出し、天にのぼり天帝にその人の罪や過ちを告げ口するため、天帝はその罪の如何によって人の寿命を縮める」という中国の「道教」の教えが一般に信ぜられていた。したがって庚申の夜は眠らなければ、さすがの三戸の虫も人の体を脱け出すことが、できないだろうと人々は宿元に集まり一夜を過ごす庚申待といわれる講をつくった。一晚話しあうのであるから「長い話は庚申の晩」にまわせとも言う。三島には庚申本尊を祀る庚申堂が徳倉、川原ヶ谷他五カ所もある。

庚申を信仰するという行事は、時には個人でも信ずるが、普通は親類縁者や近隣の人々が集まり庚申講をつくっていたようである。

庚申講が広まった起源は明らかでないが、町内の庚申塔の紀年銘十三基から推定はできる。造塔年の古い塔から列記すると、

- ①一六六四（日守）②一六八〇（平井・畑毛・桑原）
③一七〇〇（平井）④一七二〇（丹那）⑤一七四〇（柏谷・平井）
⑥一七七四（仁田）⑦一七八九（柏谷）⑧一七九三（柏谷）
⑨一八〇〇（畑毛）⑩一八〇四（日守）⑪一八二七（日守）
の順となる。

これら庚申塔の造立年が、庚申の御縁年にあたるのは、一六八〇、一七四〇、一八〇〇年であるので必ずしも縁年建立とは限らないようである。町内における庚申塔は江戸時代初期の寛文年間から既に造塔が始まったことは注目してよい。今後の石造物調査により資料が増加することは明らかなのでその時点で更に検討を加えたい。

森山隆平著『信濃の石仏』には、庚申の夜の庶民の姿が詳細に述べられている。「赤い幟が風に舞い、七人衆のきも入りで、七色菓子に七つ供花、七庚申をへめぐりて、庚申待の楽しさは、床に飾った帝釈天、青面金剛のかけ軸に、御神酒捧げて手をあわせ、六十日に一度くる、かのえのさるの夜の宴、村中その日が待遠し、日のくれ、真夜中、朝の風、誰もその夜は眠らない。男も女も輪をつくり、女も男も座をくんで、世間話しや秘めごとを、あれやこれやと語り

出す。新婚さんも老夫婦、後家もやめも出戻りも、誰でもその夜は夜とおしだ。喰べろや、酌げや、しろい酒、御馳走七いろ七つ皿、笛吹き、鉦うち、お手拍子、俳句に、短歌に、浪花ぶし、下手な三味線、一節切り、飲めや歌えや踊ろうや、コケコッコと鶏がなく、東の空が白むまで」とある。これによると庚申さんの好きなことは、赤い色のものと七のつくものである。赤い旗や幟を立てたり、花や団子、料理も七種類、集合時間が七ツ（午後四時）おひらきも七ツ（午前四時）と決めたり七人で講をつくり七つの庚申を巡拝する等である。



庚申塔 農民の間では講形態をとって行われる行幸のなかでも、もっとも普及したもの一つで、庚申の日に行われる祭。鬼神として祀る場合が多く、各地の禁忌や風俗が伝えられている

愛知県の『春日井風土記』でも庚申講の七について「ここでは七軒の講組が持ち回り宿をおいて、和尚さんを招いて行われた。持ち回りの青面金剛の軸を床の間に掛けて、お供え物をした上で、和尚さんが経をあげ、つづいて音頭取りの人の声にあわせて講員がそろって心経をあげた。それが終わると、宿元になった家で用意されたお酒と精進料理で会食し、世間話に華をさかせた。」と記してある。

東伊豆町の稲取では、昭和五十八年現在でも五組の庚申講が存続

しているようである。六十日に一度講は開かれる。礼拝本尊の青面金剛像の掛軸をかけ、団子を供え、線香をたて、農事作物に好適な日和を祈願し、団らん飲食する。農業の神と信じられていることから存続理由が、うかがえるのである。最近では昭和五十五年が縁年にあたり、六十年に一度の祭りが伊豆でも下田市をはじめ、宇佐美、河津町など各地の庚申堂で、にぎやかに催された。

庚申信仰の本尊については諸説ある。不動明王、帝釈天、猿田彦命、青面金剛から大日如来、釈迦如来、観音菩薩にも及ぶ。室町時代に作成されたといわれる『庚申縁起』には、礼拝本尊の一つに青面金剛をあげている。これによると庚申の夜の子丑の時刻（真夜中）に、釈迦、青面金剛を礼拝せよとしている。

当町の丹那（79）と間宮（4）、桑原（101）の庚申塔には、礼拝本尊の青面金剛を碑石に文字で刻記している。また伊豆の各地で存続する庚申講の多くは、六臂の青面金剛像の掛軸を所蔵し庚申日に礼拝していることから、本尊は青面金剛が多い。青面金剛は仏教の帝釈天（須弥山の頂上にいる天主）のお使いである。その形相は、手に宝剣と弓箭（きうせん）を持ち、足で鬼を踏みつけており、怒髪憤怒の姿である。この青面金剛を供養するのが、庚申の日である。この日を忘れないように「庚申」と口にしてきたのが、いつのまにやら、本尊にかわって代名詞となり、庚申塔まで誕生させてしまった。青面金剛は青い顔色である。中国の芝居では、正義の人は赤い顔、善

人は黒い顔、悪人は白い顔、温情の人は黄色、裁判官は青い顔とされている。青面金剛は人の善悪を裁く裁判官でもある。

庚申信仰は九世紀初頭、まず天皇や貴族に信仰され、詩歌管絃やその他の遊びでこの夜を過ごしたといわれる。やがて室町時代になると仏教がこれを取り入れた。そして礼拝本尊を釈迦や青面金剛とし、庚申の夜、講中ですごす「庚申待」を生み出した。江戸時代には神道も庚申信仰の本尊を猿田彦大神とし、「神道式庚申」もあらわれ、神仏習合の庚申信仰が庶民の間に広まっていったのである。



庚申塔 文字を刻したもの、青面金剛を刻したもののが代表例だが、図南は文字のみ

庚申信仰は何人かで講中をつくる。

そうした結縁のしるしや、庚申待を達成した記念に資金を出しあって造立したのが庚申塔である。資金に応じて簡素にも、

豪壮にもなる。青面金剛の像を刻するのは、石工の腕と資金面に関連がある。庚申塔はサイの神とちがって、仏教の定め、儀軌により定型がある。江戸時代になると、本尊は青面金剛となり、日月・三猿を刻むスタイルが確立した。このため三猿塔とも呼んでいる。

肥田の香徳寺の庚申塔（12）や桑原の熊野神社境内の庚申塔（102）には、三猿が塔の下部に浮彫されている。猿は「庚申」のサルから

きたものとする説(猿の信仰に結びついて猿を神使とする山王信仰など)と、三猿(見ざる・聞かざる・言わざる)を三戸になぞらえて、目・耳・口をふさぎ悪事を天帝に告げさせない意味を持つ説などいろいろである。また陽刻される猿は、一猿、二猿、三猿、群猿などこれには定型はないようである。

十一月二十九日、軽井沢派出所前の双体道祖神から直進した山道に沿って左側に建つ庚申塔(84)を尋ねる。函南町では珍しく、銘文に三界唯一心、その下部に猿が一匹浮彫されている。両手で耳を防ぐ「聞カザル」である。どうぞ悪い話は聞かないでくれという願いが込められている。碑石の左側面には、地中に埋もれて鶏が一羽、浮彫されていた。鶏があるのはここだけである。鶏は夜明けを告げる。「一番ドリ」は午前三時には鳴く、その声を床の中で聞き「二番ドリ」が午前四時ごろ鳴くとそろそろ起き出すのが、農家の日課であった。ニワトリの鳴くことで夜は明け、庚申の日は終る。早く夜が明けて欲しいという願いがニワトリには秘められている。またエトでは、申(さる)から酉(とり)に移るので、ここで猿が鶏にパトントッチするとの説もある。庚申塔では、猿や鶏はいずれも碑石の下方に位置して刻される。

碑石の上方には、畑毛の庚申塔(55)にある「^{うん}」や瑞雲と共に、太陽と月、つまり日輪、月輪が刻される。町内では瑞雲は省略されており、更に太陽も月も、○(円)二つを並列するだけの略式が仁

田(38)や日守(16・29)の庚申塔にみられ、円一つだけの日守(23・27)にある。この日輪、月輪の下に、銘文が刻される。町内には現時点で確認されていないが、青面金剛の浮彫像が刻されるのが、庚申塔の一つのタイプである。金剛像は四臂(四本のひじ)又は六臂に、それぞれの折伏用の武器を持ち、三角形の冠をいただき、怒りの形相を示すものである。庚申の晩に各宿の床の間の掛軸はこのような礼拝本尊の姿で描かれているのだが、町内ではこの石造物はなく、像を示す文字碑である。間宮清水寺の「青面金剛」(4)と丹那や桑原にある。「青面金剛明王」(79・101)がそれである。つぎに庚申塔の銘文について考察してみたい。

平井の不動の滝の傍には、庚申塔と庚申燈籠が建てられている。庚申塔には、日輪・月輪が刻されており、銘文が僅かに浮かぶ。そこでこの銘文を解読するため、あらゆる手法を用いてみる。延宝八庚申がまず読める。三百拾年前の建立であるから、その間の塵や苔の付着も尋常ではない。町教委の長野氏と頭をひねりひねり、模写する。欠損箇所、不正確なところもかなりある。大意は把握できたが、正確を期さねばならない。古文書の専門家である、同窓の友野博氏(沼津市文化財保護審議委員長)に写真判読していただく。

誤読や欠字も埋められ読みくだしはできたが、七言絶句の近体詩であるので、まだ七言四句の七字がそろわない。そこで十二月十六日、大仁町の吉川静雄先生を尋ね更に考察していただいた結果が、

平井と烟毛の庚申銘文である。

① 平井不動滝庚申銘文(63)

円覚末寺宗山妙旦謹銘焉
延宝八庚申年正月念九鳥

六拾餘霜減却春

群生新誓金剛体

放開頑石作庚申

盡地十方花発展

敬白
願主

解説(文責筆者)

鎌倉の円覚寺本山の支配下にある寺院(調査中)の妙旦が謹しみて銘文を刻します。(焉は、漢文の助字、語調をととのえる時に用いる)延宝八年は庚申縁年、正月、念は日数を表わすとき、廿即ち二十の字の代わりに用いる。二十九日、(但し九鳥は不明、九鳥を念ずとも読める)

庚申六十年の春秋を経過して、人みな決意を新たに、青面金剛に誓います。ここに堅い石に広大な佛法を刻んで庚申をつくりま

した。これにより地上のあらゆる場所は、みな美しく花のように開き、さかえて行くことでしよう。

② 烟毛庚申塔銘文(55)

庚申延宝八年

心口意清淨到仙

睡眠除却得安全

不思議亦不思議

何有三戸可卷之

願興寺
謹敬白

仲春十二日

解説(文責筆者)

庚申御縁年の延宝八年

人間の日常生活を(心口意は身口意か)、清らかで汚れないようにすれば、才能がまさりすぐれた人になれる。庚申の夜は眠らなければ安全。或いは外界との接触を少なくすれば安らかで危険は少ない(不正確)善悪を思わずは、自分に迷いがなく、それ一

途に徹底した心境になるならば、たとえ三戸の虫がいようと、これに巻きこまれはしない。(可巻之は不正確)

仲春は二月、十二日、願興寺の住職が、講中の依頼によって謹んで、うやまうや申す。敬白は願文の末尾に用いる語である。

③ 平井不動滝庚申燈籠と銘文(64)

前記の庚申塔の右前に一基の石燈籠がある。円柱状の竿石の部分に、元禄十三年(一七〇〇)の紀年銘が刻されており、庚申修願衆徒、正仙院「他多数」とまで判読できた。以下は今後拓本により解読したい。燈籠全体は、部分的に風化、剥落が始まりつつあるが火袋上部の笠、宝珠、竿石等は健全である。函南町内で、庚申燈籠は初見であるが三島市には徳倉や北田町の誓願寺境内には現存している。いずれにしても庚申塔を造塔し、その二十年後の造塔であり、講中の氏名も刻記されているので、精査を待ちたい。

④ 平井養徳寺前の庚申塔銘文(67)

養徳寺前の庚申塔には

元文五庚申年

庚申供養塔

十月日 講中二十四人

と刻されている。

この供養塔は、元文五年(一七四〇)の庚申御縁年に、講中の仲間が二十四人で資金を出しあって造塔したことがわかる。平井には

庚申堂のあった記録はないが、以上三基の紀年銘を辿ると、一六八〇、一七〇〇、一七四〇年と江戸時代も初期から庚申信仰がこの村に伝わっていたことが理解できる。

これらの庚申塔は、盗難にあった時この塔に縄で左まきにゆわえておくと盗人に罰が当たり、苦しみ反省し盗品が戻るといふ伝えが、伊豆一円に残っている。

先述の不動滝銘文、円覚末寺宗山妙旦なる人物を探し求めている。十二月十九日、平井養徳寺の御住持にお願いして歴代住職の戸籍調べをして戴いた。その結果、『宗山妙旦』なる住職は在籍しておられないことが判明した。

ただ第十世御住職に、『宗山妙蓋』と称される方がおり、享保七年(一七三三)十一月三日にご逝去なさっているとの、貴重な情報を得ることができた。銘文の年月は一六八〇年であるので、四十二年前のことである。

吉川静雄先生は、自分の名前を控えめに遠慮してこの場合『妙』とだけ記すこともあり、更に『妙旦』が『妙旦』ということもある。甚しい時は、間違えたり、新たに創作、改名することも当然ある。寺の過去帳が一級資料であるが、傍証を固める必要があるところのご示唆をいただいた。畑毛の庚申銘文中の『願興寺』の所在と共に『妙旦』は今後に残された課題である。

⑤ 輕井沢(84)や日守(16・23・29)の庚申塔の銘文には、碑石中央に「三界唯一心」とか「万法唯一心」と刻され、その上部には、日月輪が刻されている。「三界唯一心」とは、広辞苑によれば「三界の森羅万象は、自分の心に映ずる現象で、自分の心の外に三界はないということ。」また「三界に家なし」とは、どこにも安住すべき家がないという女性についていう諺である。と記述されている。三界とは欲界・色界・無色界のことである。欲界とは食欲や淫欲・睡眠欲のはなはだしい世界であり、色界とは、欲界ほど悪くはないが微妙な形や色を有する世界、したがって無色界は、形体(色)を離れた精神のみが存在する世界をさすと説明されている。

塔に等
雲な塔
万法唯
三界唯
三昧を
養うと
供養と



なお、この三界に出没する一切の精霊のことを「三界万霊」という。この三界万霊を供養することは鎌倉初期から行なわれていた。

また無縁仏を集めたところに「三界万霊塔」がよく造塔されている。これらの塔のほとんどは僧が建てており、庶民の建てたのは少ない。ここで重要なことは、

三界万霊塔は私たちが採録した石造物とはちがって、造塔するそのことが目的ではないのである。このことは、万霊塔そのものに仏教で説いているところの有情という、この世の生命あるものすべてに

霊を宿らせて、この万霊塔を回向することによって、供養することを目的としている。したがって日常だれにでも回向を受けやすい寺社の門前に建てられている場合が多いのである。

甲子塔

日守の熊野神社鳥居右側に、五基の石造物が祀られているが、その左端に高さ三十八cmの甲子と刻された甲子塔(26)がある。文政十年(一八二七)の紀年銘があるが、完形ではなく約半が遺存する。甲子塔も庚申塔と同様に干支の第一番目である甲子(きのえね)の日を信仰するならわしの結果造塔したものである。特に十一月の甲子の日には、えびす・大黒天を祀る風習があった。このことを甲子待といい、甲子講もつくられ、諸寺院の大黒天の縁日もこの日に開かれていた。したがって講中で建てる石造物も「甲子塔」とか「大黒天」の文字碑が、北伊豆では散見できる。

三、観音像

1、聖観音

観音像や観音供養塔は今回の採録で七基を数えた。人びとのさまざまな悩みや願いに応じて、三十三様の御姿となって現れ(三十三応現身)、衆生の苦悩を聞き救済してくれるということから広く信仰された。紀年銘には、一六八九(日守24)、一七五三(日守30)、

一八一〇（日守25）と江戸時代全般にわたって造塔されていたことが知れる。観音信仰は農村社会のすべて安産や豊作祈願と結びつき、観音講の組織も各部落でつくられた。

桑原高源寺には浮彫の聖観音¹⁰⁹がおられる。聖観音は正観音とも書き、馬頭、十一面、如意輪などのように変化して現れる観音に対し、変化しないままの観音を聖観音という。像容は、左手に蓮のつぼみを持ち、右手はそれに添えその蓮華の弁を開こうとしている。その他右手は下におろして掌を見せ衆生の願いに応えて施しを与える形を示したもの、両手で合掌するもの、赤子を抱く子育て形のものなどもある。

聖観音の一般的な容姿は、頭に宝冠を載せ、天衣をまとい、肩からわきの下にかけて勲章の紐のようなものを飾り、腰に裳を巻き、半裸体の姿をしている。ただし石造物にはこのような細部にわたる像容は略されている。

日本の仏教信仰は、観音信仰とも言われるように町内にはあらゆる像容が見られる。観音とは、音を観るということで、透き通った澄んだ世の中を見ることがある。この目で観音経を念ずることにより、除災招福の功德が得られるのである。

桑原の神原には雨露を凌ぐ屋根と、正面を開け三方を囲んだ観音堂がある。左端は昭和の馬頭観音であるが、他の七基は七観音として造像したものであろう、その造立年月は明らかにしない。七観音

の中央には聖観音を祀る。左に不空罽索観音・准胝観音・如意輪観音の三基、右に十一面観音・馬頭観音・千手千眼観音の三基を並列する。七観音とは、衆生化益のため身を七種に変幻した観音の総称である。

平成の現在も色とりどりの供花が飾られ、香が焚かれていることは、長い間、民間信仰の中心として、その生活の守り本尊であったことを如実に示している。

2、聖地順礼塔

西国三十三カ所順礼塔を始めとする聖地順礼塔は、日守、上沢、柏谷、軽井沢、桑原等に枚挙にいとまがない程造塔されている。聖地を順礼するという習慣は、一五世紀ごろから民間でも行われるようになり、江戸時代に最盛期を迎えた。信心とリクレーションを兼ねた大旅行である。

観音信仰は古くから普遍化していたが、紀州那智山を観音の浄土である楠陀落山の霊地とし、平安末期には、那智を一番とする西国三十三カ所観音霊場巡りの信仰があらわれ、その後、鎌倉の杉本寺を一番とする坂東三十三カ所、秩父の四万部寺を一番とする秩父三十四カ所の札所巡りができ、室町末期以降は、この百番観音を巡拝することが盛行した。更にこれでも遠路すぎるので、各地に、ミニ霊場が誕生した。すなわち西国三十三カ所順礼は、京都、大阪、和歌山、滋賀、兵庫、岐阜の二府五県にまたがるものである。順礼に

は白衣に身をつつみ、鈴の音と詠歌を唱し、数人から数十人がグループとなって出発した。道中の苦勞、旅先での見聞、帰村後の土産話、そして供養塔の建造まで、講の結成から始まり、夥しい寄金、費用の積立て等、たくましいエネルギーが必要であった。こうした順礼を成就した講の人たちにより造塔されたのが、順礼塔である。

畑毛の東光庵寺跡には十一面観音堂があり堂内に、横道三十三所観世音菩薩の銘文を持つ供養塔がみられる。天保年間の紀年銘が、読める。横道とは、東海道の東西に走るのを正道とした場合、伊豆南部の賀茂郡を中心とした伊豆国内の巡礼は縦方向、南北になるためこれを「横道」と称したのである。この他県下では、志太郡に始まる駿河一国巡礼道三十三カ所や、柏谷公民館横に造塔されている「駿豆両国（伊豆と駿河）横道三十三カ所」等が生まれた。更に三島から修善寺までの、伊豆中道三十三カ所もある。この中道を採録された沼津市の柴田寿彦氏は「三十三とは観音菩薩が大慈大悲を以て人々を救済されるに当り、三十三に化身される言い伝えに基づき、霊場は三十三カ所にわたり、法華経普門品の説く所により、この三十三カ所を巡礼する者には、功德があらたかであるとの信仰により、各地に観音霊場が設けられた」と述べられている。

町内では、駿豆両国横道第三番に間宮の清水寺があり、本堂左手に西国三十三順拝観音石塔が並び立つ。石灯籠の中には承応二年（一六五三）紀年銘の古塔もある。また仁田の新見堂については明

らかでないが、全得寺が霊場を継承したとの説もある。



巡路道標

また四国の山々を修業して回った弘法大師は、八十八カ所に霊場を定めた。これにちなむ当町の寺院は、塚本の興聖寺が十六番の札所、平井の養徳寺が二〇番札所となっている。八十八とは、男四二歳、女三三歳、子供一三歳の厄年を合わせた数といわれている。十八の煩惱でもある。『上沢誌』には横道三十三カ所巡礼供養塔に天保十一年、享保七年と十六年、寛政五年の塔が現在臨江寺境内にあり、又、文政六年の西国八十八所供養塔が、大洞山頂やうしろ道の裏山に所在する。と記されている。これらの供養塔には、霊場で得たお札や経文を書いた小石の類などを納めてあるという。

3、如意輪観音

函南町の寺院には、如意輪観音の姿がよく目につく。今回の探訪でも仁田の全得寺・間宮の清水寺・肥田の香徳寺・軽井沢の泉竜寺（85）等、路傍から見受けられた。肥田の妙法寺入口という案内標示の向い側、道路わきにも一基座しており、（9）天保の紀年銘が読めた。

如意輪の「如意」とは「如意宝珠」のことで、願っていることはどんなものでもかなえる珠という意味である。「輪」とは車輪が転がるように、どこへでも意のままに現われて人々の苦しみを取り除いてくださる観音様である。ただ「輪」は「法輪」といって仏の教えを指すのであるから、この仏に敬謙に祈らねば、願いもかなわぬわけである。

当町の像容は座像で、右手の肘を、立てひざした右足のひざにあて、その掌を右の頬につける。左手は左のひざに置くのが普通のようである。特徴とする頭を傾け、右の第一指を頬にふれた思惟像なので、この像は弥勒菩薩と区別つけにくい。民間信仰の石造物としては、如意輪観音がなじみやすいと思う。「思惟」とは、宗教や哲学について深く思考すること、如意輪観音の右手は、地獄道から人々を救う誓願の手といわれている。如意輪観音の石造物には、二臂像、四臂像、六臂像があり半伽像（座像）が一般的であるが立像もある。軽井沢や肥田の如意輪像は立派な蓮華台座にのる半伽思惟

像である。

如意輪観音をよく見受けるのは、石造物として独尊として造像する場合と、単独ではなくて六観音あるいは七観音や三十三カ所観音等のなかにも見うけるからであろう。独尊の場合は、念仏供養や、日待、庚申待供養等の主尊として造像したものと考えられる。

4、馬頭観音

観音信仰は広く深く民間の信仰対象となり、特に馬頭観音は路傍でよく目にふれる。馬頭観音は梵名を何耶揭哩嚩（あやかり）というが、大力持明王、または獅子無畏観音あるいは馬頭明王といわれる。

頭上に馬の頭を載せる理由は、転輪聖王といわれた王が駿馬にのって四方の敵を、けちらすように、恐ろしい顔をして人々の度胆を抜いてから人々をたしなめ、すべての悪や災害を取り除く慈悲心のあるといわれる。昔から馬の力は偉大であった。馬は駿足をもって四方を駆けめぐる。同様に仏の力は偉大であり、宇宙の果てまでも世界中をかけまわって人々の悪を斥け、まともな人間に立ち直らせる、馬頭観音は善をすすめ、悪をこらしめる仏なので尊敬されてきた。そして近世になると、この観音は畜生道の救済にあたると信ぜられるようになった。馬頭観音の相好は一面二臂から三面八臂に至るまで変化に富み中には怒った顔で火焰の光背をもつものもある。

函南町では箱根路の峠にかかるところの馬頭観音は、三面に顔をもち、肘は四臂である。それらの手には、宝輪、宝棒、斧、剣、綱

馬頭観音は鎌倉時代以降、馬の利用が多くなり武家の中でも信仰するものが増加したが、農民も馬を飼育できる江戸中期以降は、全国くまなく馬頭観音が造立され、道路の安全を守るものとして路傍の人気者となった。そして頭に戴く馬からの連想によって、馬の供養や無病息災の祈願がこめられるようになった。時代が下ると、特定の死馬の供養の目的で造立され、墓標的な意味をもってきた。

造立者は主として馬を農耕に使用する農家や馬力引き等の馬頭講集團・馬持中（65）や、個人である。一般的に集團で造立するとき、大形で刻像が多く、個人で造ったものは自分で飼っていた馬と、いうように、特定の馬の供養を目的とした墓標的色彩が強く、概して小形である。

伊豆中央道に入る土堤に祀られている馬頭観音（6）の位置は、道路拡張に伴ない移動したものと、塚本の市川さんに教えていただいた。

輕井沢の駒形堂にある馬頭観音の馬の顔は、一きわ大きく貫ろくがある。桑原の神原から船山の高源寺へ行く山頂部には、文政二年（一八一九）建立の「馬頭觀世音」の文字碑¹⁰⁷がある。高さ一m三十七cmの長身型で「高源寺立之」とある。間宮の清水寺には堅牢な木彫に祀られた馬頭さんがおり、住宅事情に恵まれ、馬の表情もおだやかである。また馬に限らず、牛が飼育されるようになると

牛頭、牛馬観音も造立される。平井には昭和三十三年に遠藤昌三氏の造像した「牛馬観世音」の文字碑がみられ、上沢には「牛頭観音像」も、うしろ道に造像されている。『静岡県史資料編23』では、「函南町桑原も馬を多く飼っていた所で、神原の七観音と一緒に馬頭観音を祀っている。また、路傍のあちこちに馬頭観音が祀られている。これらの馬頭観音は馬が事故死した際にその場所に立てられたもので、飼い主の「長いこと世話になった。成仏してくれよ」という供養の気持ちで込められている」と記してある。

一般的に馬頭観音像は初期のものは、舟形または板碑形の石面に三面六臂の忿怒形尊像を浮彫したものが多く、文化・文政ごろになると文字碑が造られる。文字塔も角柱形が古く、幕末になると小形の前面を加工したものとなるようである。(民俗探訪事典より)

四、じじん地神塔と山の神

地神塔

平成元年十一月十五日、間宮下町の「堅牢地神尊天」と刻された地神塔の写真撮影に行き、間宮下町6組の白井さんにお目にかかる。当地の地神さんのお祭りは、春の彼岸に講をつくり、今も賑やかに記るそうである。紀年銘によると造塔は天保七年であるので、一五〇余年もの長期間、延々とこの講は続けられていたことになる。函

南町にある地神塔の中では最古であり造塔技術もすぐれ、祀られている場所も水田地帯の中でも微高地である。間宮の地神は、作神と考えて春秋の社日に祀るようである。地神そのものの神体は稲荷であったり、その土地の開拓とか、開村伝承を伝えるものであったり、いろいろである。祖霊が三十三年あるいは五十年たつと、地神になるという信仰も全国各地にある。地神は作神であるので、稲の穂を持ってきた神とか春の社日に来て田畑に出て、秋に帰るまで作物を作っている神とかいわれるわけである。

今回の採録では、間宮、日守、平井、桑原、田代から六基調査できた。当然、地神講がつくられていた部落である。地神講とは、春分の日や秋分の日にも最も近いツチノエ（戌）の日を「社日」といい、この日に地神を祀る講を開くのである。普通「社日」には、土を動かしてはいけないという禁忌がある。土を掘るとコンジンサンが怒るといって休日とする地方もある。この日は畑仕事を休み、当番の家で地神の掛軸を床の間にかけたり、あるいは地神塔の前に集まって地神を祀った。町内の地神塔の紀年銘では、最古が一八三六年であり、現時点では一八六一年どまりであるが、地神塔が建て始められたのは、元禄時代からと推定されている。

『静岡県史資料編23』の報文には「函南町桑原には二体の地神塔があり、うち柿生土と上伊勢平の境目の合併橋のたもとに立つ塔には一堅牢地神一台座には一園家永寧」とあり「安政三丙辰年六月吉

日建立」の年紀がある。これは村下にあったものを日韓合併の年に移したものである。ジジンサンとよび、以前には「地神講」を行っていたが、現在は山の神講に含めて祀っている。正月十七日の山の神の講の日に講中で塔の前に真竹を二本立て、しめ縄を張る。「地の神さんだ」と説明されている。

町内各地の地神講が造塔した銘文をみると間宮の「堅牢地神尊天」・日守の「地神尊」・平井の「堅牢神」・田代の「地神尊」・桑原の「地神尊」という文字碑であり、この碑を神体にして祀ったようすが、うかがえるのである。

山の神

平井の不動の滝を過ぎて仁田山への入口に三角状の区有地があり、そこには山の神の石祠、サイの神、馬頭観音、牛馬観音が肩を並べて祀られている。

石祠の山の神(66)について、隣の前川昭二氏は「正月一七日と十月一七日が、お祀りの日で、塩、洗米、御神酒等を青年団が中心となってあげていました。昭和三十二年ごろまでです。正月四日の初山には、家の祖母はここを通る人たちにお神酒をあげていた記憶があります。いまは平井区ではなく、各個人がそれぞれの山に石祠を祀っているようです。」

竹折直吉著『日本の民俗』によると小下田では、十七日講といつて一月と十月の十七日に猿田彦大神の掛け軸を祀り、共同飲食をし、

当番の家ではこの日、四キロメートル以上も離れた山の神に酒や肴を供えに行く。また小山町では、大山祇命を祀り、期日は同じで早朝山に向けて矢を放つ、いまは空砲を放つ、これは山の獣が悪さをしないように祈願するものだという。

平井の遠藤昌三氏は「大字の『山の神』は前川氏のお宅でお掃除したり供花を添えたりしてお祀りしています。自分の家は、個人の山へ石祠を祀り、正月四日の初山には、清掃したり御神酒をあげます。山だけで仕事をする時代ではないので、山の神の行事も昔より少なくなりました。」と話しておられる。

田代の山の神と桑原の山の神については、『静岡県史資料編23』でつぎのように記されてある。

一函南町田代の山の神祭りは一月十七日で、これを山の神講と称し、輪番で当屋を決め、夜食に牛蒡雑炊(牛蒡・葉・大根・小豆を入れたもの)を出し、翌朝赤飯を出した。この時、女性は参加を許されず、男なら子どもでも参加を許された。山の神を女性だとし、女性が山の神にかかわることを忌む習俗は全国各地にみられる。女性山神に奉仕できるのは男性であり、同性である女性はむしろ嫉妬の対象として山の神と山の神祭りからは遠ざけられていたのであった。」「函南町桑原の山の神講は、年中最大のオフルマイである、といわれるほどの大振舞であった」と報告されている。

十一月二十九日、桑原神原の『山の神社』に参詣する。鳥居が新

しく建立されたのも、いまもかわらぬ信仰心の結集であろうか。社域の奥まった聖地に神が供えられ、神霊を象徴する御神体(104)がある。台座には中央がくぼみを持つ大きな自然石が据えられている。高さ八十cmの御神体はその後方に頂部が三角推状に切り立つ幅四〇cm、奥行一五cmの自然石である。この姿、形のよい巨石が「神の依り代」である。明らかに自然石信仰である。その対象物は何であれ、人びとが信仰するときそれは神となる。神が座す神域は、聖地であり、民間信仰のよりどころでもある。

町内の各部落に共通していることは、氏神である神社の末社にきまったように山神社が祀られている。古事記、日本書紀には多くの山の神が出現するが、代表的な山神は大山祇命である。

桑原をはじめ、箱根山西山麓の村むらは、山との生活関係は、山の神とは切っても切り離すことはできなかった。山の神は、山林農耕殖産の徳をもつ神である。山は遠い私たちの祖霊のしづまる聖地でもある。

五、地蔵(六地藏)

平成元年十一月十五日、狩野川にかかる日の出橋を渡り、日守公民館前に祀られているお地藏様(18)にお目にかかる。屋根に瓦をのせた均整のとれた地藏堂で、格子の奥に不動の姿勢で立つ。背の

高さからみてこの地蔵のために立てた堂であることがわかる。千羽鶴・供花・菓子等の供物があげられ、この地蔵を愛する地域の方の心情が伝わってくる。道路を挟んだお店の方にこの地蔵の由来をお聞きしたところ「川に架けられた日の出橋は、増水時には水に没するのでぐり橋とも言われていた。昔ある年大洪水があり、一体の地蔵尊が、打ちあげられた。村人は堤防に丁重に祀ったが、道路改良や堤防工事のため、二転、三転しやうこの地に永住権を得たこと。そこで日守区では、地蔵堂を新築し現在に至っている」とのこと、地蔵をめぐる暖まる話だった。

十一月十八日、平井養徳寺の門前に座す地蔵様(68)を下から見あげて合掌する。均整のとれた温かな顔が優しくせまる。東京青山の石勝の石工が、その像容の見事さに感動したとの由、養徳寺住職から拝聴した。台座を除いた地蔵の座高は1m四十cmもある。その大きな像容も誇るに足る。反対に小さな像は平井の柿沢、遠山孝氏宅裏の巨岩上に二体あるうちの、二十二cmの像(74)である。どうしてここにあると思う。その理由は明治の中ごろまでは丹那へ行く旧道の路傍であったとのことである。地蔵横の石祠は「稲荷」さんを祀ってあるとの奥さんの話であった。

今回の調査で地蔵は、日守、新田、平井、軽井沢、桑原から七基が採録された。地蔵信仰は日本の代表的民間信仰の一つである。したがって町内に遺存する地蔵の氷山の一角かも知れない。釈迦入蔵

後、釈迦の命令により弥勒仏が現れるまでの無仏の間にこの世に現れて、六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六界)の衆生を救うのが地蔵菩薩である。発祥地はインドと言われているが定かでない。軽井沢の地蔵(86)は、菩薩の象徴である錫杖を持っている。これは旅の途中、ジャランジャラン鳴らして、蛇や毒虫を追いかうお坊さんの生活の知恵である旅行道具のひとつ、したがって「援けを求める人がいれば、どこへでもすぐ行きますよ」という意志表示であろう。また円頂(剃髪の僧・坊主頭)や僧衣の姿も親しみやすい。手に持つ宝珠は、あらゆる苦しみや災難をとり除いてくれる宝の玉である。

地蔵信仰が日本に入ってきたのは、奈良時代とされている。盛行するのは、平安時代の末法思想によって人々に地獄への恐れが説かれるようになってからである。最初は貴族中心だったが、その後地方武士や僧侶の間に広まり、地蔵の徳は地獄の恐怖に対して、地獄からこの世に蘇生するという信仰が、広まっていた。中世以降、塞の河原との結びつきで地獄の恐怖からの救い主としての地蔵が、広く民衆に浸透した要因である。地獄だけでなく、この世に生きる人間のあらゆる願望は巾が広い。延命、火防、盗難除、病氣平癒から水子、子育て、安産まで地蔵にゆだねるようになる。桑原の高源寺はその境界を「船山境界地蔵」で画している。宝暦五年の造像(108)である。特に地蔵は、塞の河原で子どもとの深い結びつきにより、

民間信仰では子供を守る仏として大きな位置を占めるようになった。

路傍から寺院を垣間

見るとき、六地藏の姿がよく目に付く。六道能化（六道の衆生を救うこと）がお地藏さんの願いである。そこでこの六道に一体ずつ地藏を配する六地藏が造像され寺や墓地の入口に配される。六地藏のあるところから外は娑婆世界であり、これからは法域、仏の世界、つまりあの世であるという境界線を示している。

地藏の姿は「十王經」というお経による分類

と「仏像図絵」による

分類とがあり、江戸時代は「仏像図絵」のものが多く。



六 地 蔵

① 錫杖と如意珠をもつのが延命地藏

② 施無畏印をむすぶのが陀羅尼地藏

③ 幡幢をもつのが法印地藏

④ 合掌するのが宝性地蔵

⑤ 数珠をもつのが護法地藏

⑥ 鉢香炉をもつのが法性地藏

しかし「仁田の全得寺の六地藏の中、天蓋（仏の上にかざすきぬがさ）と幡幢を持っているのは、一般の六地藏尊とは類型を異にしている」と吉川静雄先生は『伊豆のサイの神』の中で指摘なさっているように、必ずしも定型にはこだわらないようである。また『真史』では、桑原の六地藏について竹にシキミをさして盆の供養をしているようすが、紹介されている。

町内には多くの地藏堂があるが、著名なのは饗の沢の地藏堂である。鎌倉幕府は京都にならって、建長寺、円覚寺等の五山をつくり、大仏をつくり、そこを極楽浄土にたとえ、箱根や日金山を地獄にたとえた。地獄におちた人々を救うのが地藏様であることから各地に地藏が祀られた。この日金の地藏信仰は関東一円に広がり、家族が亡くなるとその靈魂は日金山に行くといわれ、春秋の彼岸になると日金山詣でが盛んとなった。平井の養徳寺や饗の沢の法伝寺にある地獄極楽の絵は、因果応報の理をとく日金信仰のあらわれである。平井から山道を養徳寺を通り、びんの沢の地藏堂へと行く。ここは

日金山の一の木戸ともいわれ、たとえ日金山に参ってもここにお参りしなければ片参りだとさえ意識されているところである。と『県史』はいう。びんの沢から軽井沢の泉龍寺の観音様や地藏様にお念仏（御詠歌）をとえながら日金山まで詣でたのである。いまにのこる地藏信仰のお念仏に、

・聞いて尋ねて来てみれば、いつも絶えせぬ旅人の声。

・六道の辻に立ちたる地藏尊、導きたまえ弥陀の浄土へ。

・ふもとより遙かに拜む地藏尊、絶えずたなびく紫の雲。

などがある。

六、磨崖仏と三宝荒神

畑毛の三宝荒神社の巨岩の上に石祠が祀られている。形のよく整った石祠であり、石工の心が伝わる文化遺産でもある。鳥居が僅かに神社であること証している。平成元年十一月十日、日没近かったので、神域は薄暗く巨岩は一層神秘さを増していた。

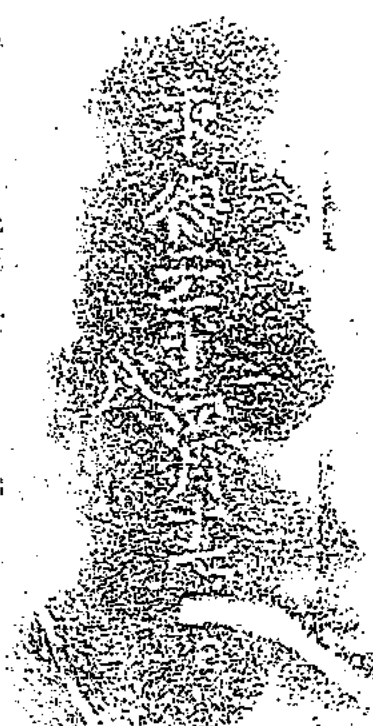
磨崖仏とは、自然の丘陵の岩壁や巨岩に彫刻された仏像である。インド、中国に多く日本では臼杵や大谷の磨崖仏はよく知られている。当地では箱根町や韮山の真珠院墓地、奈古谷昆沙門堂参道の磨崖仏が著名である。

畑毛の磨崖仏は、三宝荒神社境内にある二つに割れた巨岩の一方

に種子、他方に地藏菩薩像が線刻されている。



地藏菩薩像



永徳二年壬戌四月十一日

石造物を調査する上で重要なものに、仏の名を示す梵字がある。梵字は古代インドの文字でサンスクリット語を書くのに使われ、仏教用語にもなっている。この梵字を種子、あるいは種子と呼び、石

仏や石塔に多く使われている。この種子がいかなる仏名を表すかということとは、その造形物の第一義的な意味をうかがえるので大切である。

畑毛の磨崖仏には、径七十三cmの日輪の中に種子である『キリーク』が刻されている。注目したいことは、キリークは阿弥陀如来の種子である。したがって線刻されている仏は、阿弥陀であるべきだが、左側の尊像は、左手に錫杖をもち、右手に宝珠をささげ、僧衣を着て、円頂（頭の丸い）の地蔵菩薩像である。地蔵の種子は『カ・イー』などであるから右側の種子とは異なる。

同様な例は、箱根や韮山の磨崖仏にも遺存している。特に阿弥陀如来と地蔵菩薩の二尊を並列した石仏は関西地方に多い。このことは、二尊は同体であるが、異名であるとする民間信仰的発想から生じたものである。すなわち地蔵菩薩は、現世に幸福を与え、苦しみを救い、しかも地獄界まで救済の手をのべ、阿弥陀如来の西方極楽浄土へ、案内してくれる万能の菩薩であり、阿弥陀如来と同体であるという信仰のあらわれである。こうした地蔵信仰は浄土思想から発展したものであり、阿弥陀如来の浄土へは、地蔵が導くというものである。

この像は、紀年銘によると「永徳二年壬戌四月十一日」に造られたことがわかる（48）韮山町奈古谷の磨崖仏の紀年銘によれば、貞治二年（一三六三）・至徳二年（一三八五）・明徳二年（一三九一）

の三尊と比較すると畑毛の永徳二年（一三八二）は、まったく同時期の造像といわねばならない。これよりやや古いのが箱根の永仁三年（一二九三）・永仁三年（一二九五）・正安二年（一三〇〇）・應長元年（一三一〇）がある。しかし奈古谷には同じ毘沙門堂に、乾元二年（一三〇三）紀年銘の地蔵菩薩石仏像があるもので、十三世紀末から十四世紀末にかけて、当地方の磨崖仏造立の盛行がうかがえるのである。

なお韮山町の中世の石造物については『韮山町史』第四巻に、尾形礼正氏が詳細な調査報告を寄せている。

畑毛の磨崖仏である地蔵尊は、線刻で薄く写真では鮮明さを欠いたので、韮山町の拓本研究家・安藤尊夫氏をわずらわし拓本をとっていただいた。厚く御礼を申しあげたい。

三宝荒神

平井の不動の滝から、柿沢へ行く旧道に添って駒形山がある。十一月二十五日、岩本忠氏宅裏山（駒形山）の通称「荒神さん」を尋ねる。小学生のころ、村の老若男女が巨岩の前で祈っている敬虔な姿が、脳裏を駆け巡る。子どもの頃は、薄暗く竹が生い茂り、急坂だったので恐ろしい場所だった記憶が蘇る。岩本家から急傾斜を数十メートルのぼって、荒神を祀る石祠の前に近づく。巨岩が今にも崩落しそうな気配である。

『昔は、不動さんと荒神さんの祭りは同日に正・五・九の月にやっ

ていたが、現在は高齢者も多くなり、足場も悪くなったので、岩本家だけで、荒神さんを祀っている。正月二十八日には、赤飯を炊き、頭付きの魚や野菜、果物、塩、洗米等を供える」とのこと、岩本家には、養徳寺先代住職の描かれた、荒神画像が保存されている。老師は、この原図を巨岩に刻するようにとのことだったが、何処にしようかと考えてるうちに二十有余年経過してしまったと、八十二歳の岩本老は笑う。

荒神洞は、畑毛の磨崖仏のある三宝荒神社と、環境的にはまったく似ている。山中の自然の丘陵に抱かれた巨岩の懷中である。そこからは、聖水が年中枯れることなく湧出している。しかも水量はかなりのものがある。

荒神は石祠に祀られており、傍らに舟光背型の浮彫の立像が一基と三脚付石造製香炉が添えられている。巨岩の一部に、数文字が刻まれているが、損耗がひどく解読出来ない。

三宝荒神の三宝とは、仏教の仏・法・僧のことである。篤く三宝を敬えとは聖徳太子の言である。したがって荒神は、その三宝の守護神である。しかし仏教本来のものではない。日本では、平安以降に、神仏混淆の神として、はじめは修験道で信仰されていた。

荒神はたいへん清浄な地を好むとされている。平井の荒神洞や畑毛の三宝荒神社境内などは、荒神の好む清浄な地であり、修験道にふさわしい巨岩の場所である。巨岩には磨崖仏や文字が刻される。や

がてこの神は、清浄なところを好むことから一般家庭では、台所の神としてまつられるようになった。台所には、竈（かまど）があり、竈神（こうじん）とよばれるようになったのであろう。竹折直吉氏は「静岡県下では、一般に荒神さんはかまどの神とされているが、志太郡岡部町のあたりでは、子どもの守り神ともいわれ、特に子どものもやけを治してくれる神」と『日本の民俗』の中で記してある。

岩本忠氏は『荒神さんは「福德・除災の神」です。』とにこやかに話された。神域は注連縄が張られ、あくまでも清浄な地であった。

七、阿弥陀如来

十一月十日畑毛正法院の阿弥陀如来石像（49）を尋ねる。正法院前庭で、四季風雨を一身に受け座しておられる。お顔が柔和な石仏である。阿弥陀様は、西方浄土にあって、人々に永遠の救いを与えてくださる仏として信仰されている。特に釈迦滅後、千五百年に当たる平安朝以後は、末法の時代に入るため、自らの力では救いを求められない古代の人々は他力に因るしかない。それには阿弥陀如来の功德におすがりするしかないとして、厚い信仰を生んだのである。

南無阿弥陀仏と合掌して祈ることにより、西方極楽世界に信者は、生れかえるわけである。

阿弥陀三尊とは、阿弥陀仏とその左右に、脇侍する観世音、勢至

の二菩薩を指している。観世音菩薩は、慈悲の面を担当する脇侍である。勢至菩薩は、知恵門の担当である。観音とよく似た姿であるが、頭上の宝冠に化仏のかわりに宝瓶をいただいているので見分けられる。正法院の観音さまは、馬頭観音である。

八、大日如来

十一月十八日 丹那の溝口文吉氏宅でお祀りしている「伝大日如来」石像（77）を訪ねる。昔柿沢川に打ちあげられた像を、見つけられて木祠をつくり、毎年正月、五月・九月の年三回、洗米・塩等の供物をあげているとのこと、以前は一日・十五日も香花をあげていた。来年は、木祠も雨漏りがしてきたので改築したいとの由。大日如来というのは、太陽の神「オテントウさんの神」という先祖からの言い伝えによるもの、等皆さんから聴取できた。

現地は宅地隣の山腹を平坦に整形して、そこに祠をつくり祀られていた。確かに改修が必要なほど、石像も傾斜しており風雨に耐えた歴史を物語っていたが、皆さんが丁寧にこの石仏を祀っておられる様子は、うかがえた。興味をひくことは、顔面に朱が塗られておったらしく、僅かに眼や口元にその残影が認められた。単体の浮彫座像である。

大日如来は、密教における最高の仏である。昼夜の別のある太陽

の威力を更に上回る大きな光明を備えていることから大日如来という。その呪文を唱えれば、諸病が治り、また安産にもあらたかという現世利益がある。

当町では、丹那と日守（32）に二体の大日如来と伝えられる石造仏が安置されている。大日如来は大きく二つに分けられる。

一つは胸部にあげた左手の人指しゆびを、右手で握る智拳印という型であり、他の一つは、座して左のたなごころの上に、右のたなごころを重ねて、両親ゆびの先を会わせる法界定印の型である。丹那の大日如来は智拳印を結ぶように胸前で両手を合わせている。

十一月二十九日、どうしてもこの手印が気にかかり再度訪ずれる。損耗がひどく断定できない。野外の石造物であるので、印相が明白でないのは、いたしかたないことである。

更に大日如来の特色は、釈迦・阿弥陀・薬師如来などちがって、如来ではあるが宝冠を戴き、装身具をつけた菩薩の形で造立されることである。丹那の大日如来の宝冠は偏平であり、分別に迷うところである。やはり「伝大日如来」である。

九、不動明王

平井の不動の滝の傍に、不動堂がある。浮浪者が侵入するとかで、錠がかけられ、格子の中に、サイの神の曳車が見える。前川昭二氏夫妻の話を聞く「お不動さんは、三体祀である。正月二十七日、五月二十八日、九月二十八日には、不動堂の中に四、五十人の方が集まって、不動さんのお経をあげています。今は、おまつりする日は、生神さん（人間）の都合で日曜日が多くなりました。当番は平井区の隣組が順番にやっています。私たちも若いころはよく、安産祈願をいたしました。」お不動さんは、悪を断じ仏心をおこさせ、人の悩みをくだいてくださる。「大日経」では大日如来の使者であり、菩提心を求めるときの障害を碎き、大力を発揮する明王である。厄除開運・学業成就・事業完成等、その障害を打ち碎くのであるから、優しくはない。目くじらをたて、厳しく叱り、愛のムチをくだす。したがって石仏の中でも見わけやすい。

右手に剣を持ち、左手に絹索（なわ）をもつ。火焰に包まれているのがその象徴であり、恐ろしい忿怒の形相である。右手の剣は、悪業を切り払う、そして左手の縄でしばりあげてしまう。その力は金剛力という。

光背の赤い炎は、火を背負い、力に満ちた強い神をあらわし、火口より一切の災いを打ち破り、動揺しない不動の姿を映し出すもの

である。

大竹の朱がある不動明王（95）は赤い炎を示している。丹那トンネル工事の際、造られたという急な石段をのぼる。左がわに自然丘陵の岩山を削り石祠をつくり不動明王を安置する。叠々たる巨岩の上に立ち火炎に包まれた光背で全身を火の中にさらす。お不動さんの信仰の深さは、今日も供えられたお花やミカンが物語っている。

十一月二十九日、「冷川不動」の滝の前に立つ、不動の滝、左上方の石造物は下からではよく見えない。せまい石段をのぼると、石祠の中に不動明王（106）は祀られていた。

両手は損耗がひどく明らかではないが、光背は火炎をあらわし、顔の表情も豊満である。像全体が、赤色を示しているのは、石質のためであろうか。傍らの不動堂と、文字碑の「不動明王」がよく調和していた。

畑の皇産霊神社境内にある石祠には、不動尊を祀っている。忿怒の形相ではあるが、右手の剣、左手の縄が欠けているので不動さんらしくない。像容からみて木彫かも知れない。

十、騎馬像

軽井沢の弦巻山にあった駒形堂が、泉竜寺の寺域に移されたのは、いつの日か明らかではない。承平六年平将門が造像したと伝えられ

る馬頭観音は「馬の神」として近郷にその名が知れわたり、やがて泉竜寺の本尊仏になったと『丹那地域風土記』は記してある。

駒形堂に遺存する騎馬像については、「駒形堂の歌」の中に、源頼朝がこの堂へ参詣したとき名馬池月を見出した。そして秩父守重忠が、矢の根で石に刻したのが「頼朝公が名馬池月に乗る姿だ」と歌っている。また『伊豆鑑』では池月号の死と結びつけている。

騎馬像(87)は91cm×76cmの板状の石材に浮彫されており、石馬の右前足を踏み出す瞬間を刻している。馬に比し、馬上の人物像は幼児の体型で貧弱すぎる。とても頼朝の勇姿には想定できない。像容全体も稚拙であるが、駒形堂の伝承に重厚さを添える騎馬像である。

駒が岳山頂にある「駒形権現」は大磯の高麗神社を勧請したといわれ、箱根の各地(畑宿・旧箱根宿・元箱根)などにも駒形権現が今なお残されている。軽井沢の弦巻山にあった駒形堂もその一つと推定した『丹那地域風土記』は信憑性がある。

馬が、交通や農耕の重要な担い手であったところに、相模・伊豆・駿河の馬持ち人の信仰により、馬の健康と安全を祈りつつ奉齋されたのが、石馬像であろう。

間宮神明神社境内の石造浮彫馬(2)もユニークである。十一月十五日、参詣する。格子はきちんと錠がかけられている。

境内駒形社の中央に、駒形大明神と刻された石造馬が祀られてい

た。神明神社の鳥居をくぐり右側である。三島大社の御神馬も右側に祀られている。右にある場合は、神様の乗り物、即ち乗代として、生きた馬を奉齋するのが最初の姿であった。しかし生き馬では、飼料がかさむ、そこで木馬となり、やがて庶民は絵馬を捧げる。絵馬の願いごとと近年は自分の願望が多い。

神明神社の浮彫石馬像には、豆州間宮村の遠藤佐近の氏名が刻されている。延享二年(一七四五)、今から二五〇年も前のことである。

三島大社の榎茂彦氏にお聞きしたところ、遠藤佐近は、神明社の歴代神主の氏名であるとのこと。神主が奉齋する石馬は、神の乗代としての意味があったのではないかと由であった。

治承三年十月十一日、源頼朝は、馬宮荘を走湯山領として寄進している。(三宝院文書)

また「玉海」所収の頼朝書状写によると、「伊豆国馬宮庄……」とある。間宮は「馬宮の荘」であったとする説もある。馬に縁の深い土地、馬宮荘は、間宮付近のことであろうか。

十一、石棒

平井の養徳寺に祀られている石棒は、「びんの沢遺跡」出土と伝えられている。同遺跡から出土した縄文時代中期から後期にかけ

ての、縄文土器も平井の梶尾家に蔵されているので、今から四千五百年くらい前の石造物である。

石棒は男性の男茎を象徴する。日常は縄文住居の内外に転がしておく。いざ祭儀がはじまると地上にたて、幾度も動物の血をそそぎ、肉を懸け活力のみなざるのをまっけて聖火を焚き、白い石棒の姿を顕現させる。男性と、動物世界の甦えりを願う祭りの中心となったのが石棒である。

男性の石棒に対し女性は成女の姿をとる女神像（土偶）をつくる。製作時は完全な姿であったのが、発掘時点ではバラバラとなり、徹底的に壊されている。女神の死の表現である。女神を殺害しその身を各地に蒔けば、世界は甦り植物が芽吹き春が来るとされる。女性の祭儀である。

縄文時代、食糧を得ることは、彼らの重要な仕事であった。獣では猪や鹿などが対象となる。人よりも足の速い、季節に敏感に対応するだけにその捕獲はむずかしい。そこで、宗教、呪術の世界が登場してくる。

石棒は動物の豊饒、土偶は植物の豊饒を願ってムラの男性、女性が祭祀したものである。石棒に対し土偶は破壊され、四方に蒔き散らされるので発見されにくい。

(表2)

石造物の年代別造立数

(平成元年12月現在)

造立年代	種別 の神	灰甲塔	観音	如来塔	馬頭	地神	地藏	阿彌陀	駒形	小計	災害史(豆州志稿他)
寛永年間(1624~1660)											
寛文年間(1661~1672)		1								1	
延宝年間(1673~1680)	1	3								4	
天和年間(1681~1683)							1			1	
貞享年間(1684~1687)											
元禄年間(1688~1703)		1	1							2	元禄7年大降雨
宝永年間(1704~1710)											宝永4年富士噴火
正徳年間(1711~1715)	1									1	
享保年間(1716~1735)	2	1		2						5	延宝、コレラ大流行 イナゴ、凶作
元文年間(1736~1740)		2								2	疫病流行
寛保年間(1741~1743)											
延享年間(1744~1747)	1								2	3	
寛延年間(1748~1750)											
宝暦年間(1751~1763)				1			1	1		3	
明和年間(1764~1771)											
安永年間(1772~1780)		1			1					2	
天明年間(1781~1788)											元年~7年まで: 大風・ 地震・洪水・ききん
寛政年間(1789~1800)	2	4		1						7	
享和年間(1801~1803)					1					1	
文化年間(1804~1817)	1	1		1	1					4	
文政年間(1818~1829)		1		1	1					3	8年凶作 11年冷害
天保年間(1830~1843)	1			1	3	1				6	4年ききん, 7年ききん 8年長雨
弘化年間(1844~1847)	1				1					2	
嘉永年間(1848~1853)											
安政年間(1854~1859)						3				3	3年大風雨
万延年間(1860)											
文久年間(1861~1863)						1				1	2年コレラ
元治年間(1864)											元年凶作
慶応年間(1865~1867)											
明治年間(1868~1911)											
大正年間(1912~1925)											
昭和年間(1926~)											
年代不詳	32	7	2	0	8	1	5	0	1	56	
合計	42	22	3	7	16	6	7	1	3	107	

十二、石造物の年代別造立数

町内の路傍に所在する石造物で、今回採録された総数は一一二基である。この中の縄文時代の石棒と、中世の永徳二年の紀年銘を刻した磨崖仏一基を別として他はすべて近世の江戸時代である。今回の採録には、中・近世の五輪塔とか宝篋印塔、無縫塔などは除外している。したがって各寺院に遺存する墓石や各神社の石鳥居はじめ各種の石造物は採録していない。これは賢明な採録方法で、後日「函南町神社寺院の石造物」として一括調査するに便である。その調査が完了し今回の採録に漏れたものを加えると、数百基になろうかと推定されるのである。そうした時に時代別、年代別分布は考察されるべきであるが、現時点で五十一基の紀年銘(表2)から、あくまでも中間報告として概観してみたい。

紀年銘石造物を数量的に捉えようと、庚申塔の十五基、サイの神の十基、馬頭観音の八基がベスト3である。庚申塔については、六十八%に紀年銘が刻されていたが、これ以外に摩耗、欠損等により判読不明な塔もあるので実数は増すと思われる。庚申塔は講中で、庚申縁年造塔を目的とするので、紀年銘は刻したくなるのが人情であろう。つぎにサイの神については、全体の二十三%に紀年銘が刻されていた。部落内のある集団の造塔の場合、無記名、無紀年も奥ゆかしい気がする。特にサイの神の丸彫像は、紀年銘を刻することに

より、神体を損傷することにもなる。三位の馬頭観音には半数の五〇%に紀年銘があった。個人造塔の場合は牛馬の墓標であり供養塔でもある。集団に対して個別造塔の場合、紀年銘の有無は今後の精査に待ちたい。石造物で百%紀年銘を刻するのは、順拝塔である。やはり順拝年は重要な意義をもつのであろう。

表2をみると、町内の造立年代の大要が把握できる。江戸時代最古の石造物は日守にある寛文四年(一六六四)の庚申塔である。このことは、寛文年間以降、徐々に村落共同体が発展し、いろいろな信仰が庶民層にまで広がり、その結果村のあちこちで石造物が造立され始めたことを意味している。特に庚申講は、平井、畑毛、桑原、日守等において造塔できるまでの体質を具備していたのである。

しかしながら、一七世紀における造塔はすくなく、石造物の萌芽期といえよう。そして一七〇〇年代、享保年間になるとサイの神、庚申塔、順拝塔などの造塔がはじまる。このころ、痘瘡、赤痢、蝗害、凶作等が続く。一七世紀に八基に対し一八世紀二十三基の紀年銘があることは、ゆるやかではあるものの民間信仰の高まりを示す。そしてつぎの一九世紀前半の寛政から弘化までの約五〇年間に爆発的に増加する傾向が、うかがえるのである。この背景は、江戸時代も後期になると、幾多の自然災害を克服して町民をはじめ、農民、漁民にいたるまで新しい息吹きの中で、生活は活気を帯びてきたのである。その結果神社、仏閣の春秋の祭礼や縁日、あるいは家庭で

の冠婚葬祭等一層盛んとなった庶民生活がある。各種の講は緊密に結ばれ、おふるまい、酒盛りは派手になっていったことを物語る。やがて一九世紀も後半になると、地神塔以外に紀年銘は見あたらなくなる。商品経済の発達からか、江戸後期の国情の変化からか、いずれにせよ、明治維新の夜明けの近かったことは事実である。

小 結

平成元年度、函南町で採録した路傍の石造物は信仰の対象としたものである。そこには民衆の祈りの姿があった。その多くは家内安全・無病息災・至福招来などを願う村人の願望と結果した意志により造塔されたものである。石造物一覧表や分布地図からは、近世の函南の里に於ける民間信仰の実態が読みとれる。

石造物を大別すると、村内だけの信仰活動であったさまざまな講（山の神講、観音講、庚申講など）で造塔したものと、村を出て行動した宗教活動である巡礼・遍路とよばれる霊場や聖蹟を参拝した記念の造塔とに区別される。前者にはもちろん個人の造塔もある。しめ縄を掛け聖地とした場所も、自然石もある。民間信仰は年中行事や通過儀礼や葬制、俗信等その範囲は広く深い。

路傍の石造物を数量の面から捉えみると、サイの神の四十基、庚申塔の二十一基、そして観音信仰関係の二十三基が突出して多い。

視野を転じて、民間信仰の守り本尊として石仏を見つめたとき、山折哲雄氏は三グループに大別した。第一は観音信仰関係の聖観音、馬頭観音、巡拝塔であり、第二は大日如来、不動明王、第三は地藏菩薩、サイの神等、村の辻に建てられた石造物である。

路傍で気づくことは、カメラを向けると赤い帽子と赤い涎掛けが視野に入り撮影にはこれではずさねばならぬことであった。その石仏は地藏とサイの神にもある。両者の共通点を考えると、地藏はこの世とあの世との境界に立つ救済神であり、サイの神は外部から侵入する疫病を防ぐ守り神である。つまり両者とも境界を守ることによって一致する。つぎに涎かけを着付けることは、乳幼児を失った親たちが、亡き児の冥福や救済を地藏に祈願したものである。サイの神は子どもの神である。地藏もまた子どもを助ける信仰と結びつく。安産、子安、子育て地藏等、子どもの誕生から成長にかかわる地藏が多い。サイの河原に立つ地藏もまた子どもを守る。したがって両者は仲よくムラの辻や入り口の境界に建てられていたものである。

地藏を子どもの守り神とすると母なる仏は観音菩薩である。三十三に化身する観音は、大慈大悲をもって人びとを救済する。聖観音を中心とした七観音、仏の中では一番女性らしい如意輪、家族同様な馬頭、更には千手千眼観音めぐりの順拝塔、観音信仰の中は広く愛情は深く、母なる姿である。

つぎに父なる信仰の対象は、不動明王である。平井や冷川にのこ

る不動堂、不動明王は大日如來の使者でもある。あらゆる障害を打ち砕き、大力を発揮し厄除開運、事業遂行、光背の炎はあらゆる煩惱を焼きつくす、それは一家の父の姿でもある。以上三グループの視点にたった今後の精査が期待されるのである。

つぎに民間信仰の範囲を検討してみたい。江戸時代の函南は、各家々のまとまりである村（部落）を単位とした地縁的集団である。このことは、各部落の象徴として、守護神として氏神を祀り、部落民は氏子であった。したがって氏神を祀る範囲が、民間信仰の範囲でもあり、その範囲は、サイの神や地蔵や庚申塔などで村の内と外を明確に区別した。そこは人通りもあり、面積的にも広く、子どもの遊び場でもあった。子どもを守るサイの神や地蔵は静かに子どもを見つめていた。

民間信仰の種類は、一部落に複数のサイの神を祀るように、個々の家の屋内にも、屋敷神にも、同族神にも多くの神仏が祀られている。太陽や月に対する崇拝から、日待ち月待ち講や、仏教系の念仏講、道教系の庚申講、等々であり、その供養のために造塔された石造物は多種類におよぶのである。

柳田国男は、先祖の霊を祀る祖霊信仰を日本人の信仰の基本的形態としている。人の死後、死霊となり一定期間の祭祀がくり返されたのち、祖霊となり子孫の繁栄を願うという信仰である。

路傍の石造物は自然の中にあってこそ美しさがある。江戸時代の

定位置に安住の地がある。石は無言である。しかし石造物は、土地の歴史を語る証人でもある。（平成元年十二月記）

追記

1、町内の石造物、八十一カ所を同行調査・写真撮影していただいた町教育委員会、長野康敏氏のご苦勞に感謝いたします。

2、本稿は筆者の専門外の分野のため、独断や誤認箇所は、ぜひご指摘いただき、今後訂正したい所存です。

3、路傍の石造物は、摩耗、欠損がひどく、判断に苦しみます。それをのり越えて調査にあたられた梶尾是彦氏、渡辺宗正氏、石川雅道氏、久保田弘氏、三田利雄氏の各調査員の方々に深く敬意を表したく存じます。

（参考文献）

静岡県編『静岡県史』資料編23 民俗一 平成元年

市・町教員編『函南町史』『韭山町史』『三島市誌』

中伊豆町『神社寺院誌』昭和六三年

東伊豆町『東伊豆町の石造物塔』昭和五八年

御殿場市『御殿場の供養塔と道標』昭和五十年

富士市『富士市の石造文化財』昭和六十年

小田原市『小田原の野仏たち』昭和六一年

春日井市『春日井風土記』 平成元年

吉川静雄『伊豆のサイの神』前・後編 昭和五一年～五三年

森山隆平『信濃の石仏』 昭和五四年

松濤弘道『日本の仏様を知る事典』 平成元年

望月信成他『仏像 ―心とかたち―』 昭和四十年

斎藤与一他『平井誌』 昭和四四年

服部司孝他『丹那地域風土記』 昭和四五年

露木義俊他『上沢誌』 昭和五一年

秋山高志他『農民生活史事典』 昭和五四年より文中の

カット図は転載させていただきました。

函南町の石造物（一）

発行日 1990年3月30日

編集発行 函南町教育委員会
静岡県田方郡函南町仁田9番

印刷 小野印刷所



函南町中央公民館図書室



110165461

題字 … 露 木 稔 教育長

西南町立図書館 110165461

